

第5章 C区の調査

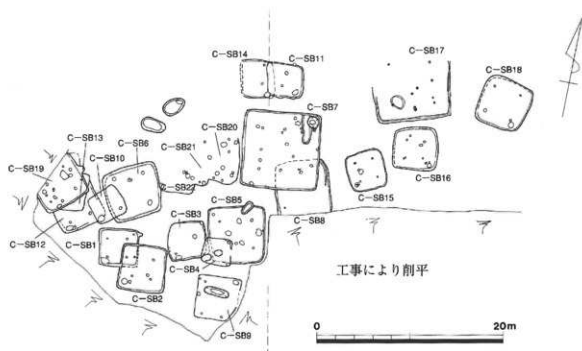
第2次調査のC区は、B区の南西に位置する。調査範囲は東西約60m、南北約35mに設定されたが、工事中のところや、すでに削平されたところもあり、実際の調査面積はその71%の約1,500㎡であった。

発掘調査区は畑地や草生地であったので、重機により耕作土を削平し、黒色有機土層上面から人力により発掘を進めた。

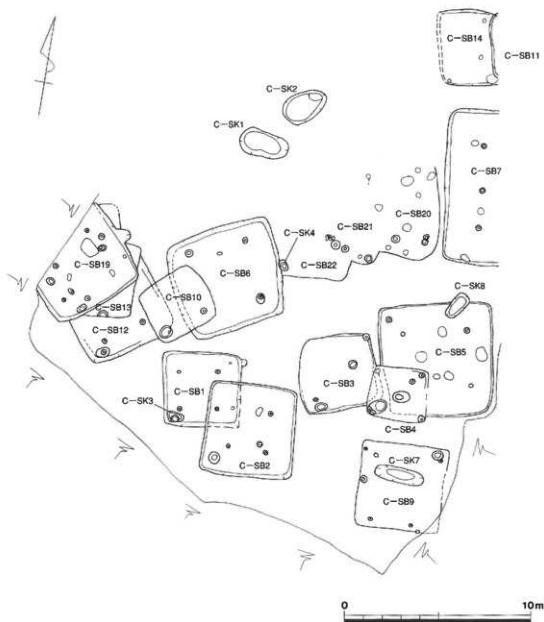
その結果、C区内からは、22軒の竪穴住居址と6基の土壇が検出された。住居址は、22軒すべてが竪穴住居址である。竪穴住居址は発掘調査区の南西側に密集している。南西側で切り合ったり、重複したりしている竪穴住居址はC-SB1とC-SB2、C-SB3とC-SB4とC-SB5、C-SB7とC-SB8、C-SB11とC-SB14、C-SB6とC-SB10とC-SB12とC-SB13とC-SB19とC-SB20とC-SB21とC-SB22の5つのグループがある。切り合いや重複していない竪穴住居址はC-SB9のわずか1軒のみである。

北東側では竪穴住居址は切り合いも重複もなく、C-SB15・C-SB16・C-SB17・C-SB18の4軒とも散在している。

土壇は6基検出されたが、A区の22基、B区の18基に比べると少なくなっている。土壇C-SK1～C-SK4・C-SK7・C-SK8までの8基が中央部に所在している。



挿図第78 C区全体における遺構の分布



挿図第79 C区における遺構の分布1

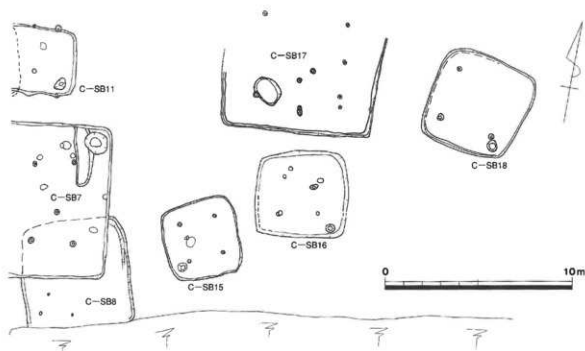
第1節 竪穴住居址

C区で検出された竪穴住居址は、22軒である。

各竪穴住居址の主軸方位は、竪穴住居址C-SB17の1軒は真北を向いているが、北西向きの竪穴住居址はC-SB1からC-SB10とC-SB12からC-SB15の14軒である。北東向きの竪穴住居址はC-SB11とC-SB16、C-SB18からC-SB22の7軒である。

1、竪穴住居址C-SB1

(1) 遺構 (挿図第79、挿図第81、図版第37、図版第40の1、図版第41)



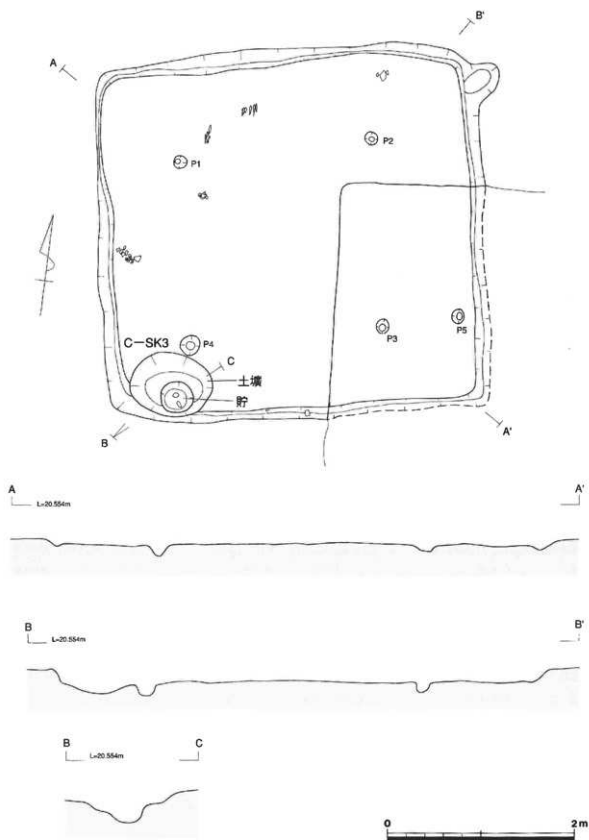
挿図第80 C区における遺構の分布 2

竪穴住居址C-SB1は、C区内の南西に位置する。竪穴住居址の南東側は竪穴住居址C-SB2に切られている。しかしながらC-SB2の床面よりC-SB1の床面が低いために壁溝が確認された。削平面から床面までの深さは12cmである。壁溝は南西隅の貯蔵穴の部分を除いてすべて巡っている。溝の幅は6～20cm、深さは6～10mである。竪穴住居址の床面は、東西の長さが3.86m、南北の長さが3.74m、面積約14㎡で、平面形はほぼ正方形である。主軸方位はN-9°-Wである。柱穴はP1(16×14×13)、P2(15×15×12)、P3(16×13×10)、P4(22×22×14)の4個で、各柱穴間の長さはP1～P2が2.10m、P2～P3が2.08m、P3～P4が2.10m、P4～P1が2.08mである。貯蔵穴は南西隅に認められ、土壇C-SK3を切ってつくられている。平面形はほぼ円形で断面形は鍋底形をしており、その規模は長径30cm、短径30cm、深さ30cmである。炉址は検出されなかった。

(2) 遺物 (挿図第102の1～15、図版第47の1～3)

1～13・15はC-SB1の床面から検出し、14は、埋土中から出土した。1～8は甕である。1・2は、口縁部の破片である。ゆるやかに外反する口縁部をもち、口端は面取りされて平坦に仕上げられている。口端には、ヘラ状器具によるキザミが施されている。3・4はくの字状口縁をもつ甕である。上胴部から口縁部の破片でありいずれも口端を欠く。5・6は、台付甕の下胴部から底部にかけてのものであり、5は丸味をおびた脚端に直線的に開いている。6の脚台端は面取りして平坦面をつくる。脚台部はやや内弯気味に開いている。7は受口甕の口縁部と脚台部である。直行する受口状の口縁部をもち、器壁は薄い。口縁部にはクシ状器具によるキザミを加え、上胴部には斜位のハケメを施した後に、ハケメによる平行線が認められる。脚台部はハの字状に直線的に開く。8は、口縁部から上胴部にかけてのもので、口端を丸く仕上げている。

9は、壺の口縁部破片である。口端近くでやや外反した口縁部をもつ。頸部に三角状の隆帯を付け、



挿図第81 竪穴住居址C-SB1実測図

その上にクシ状器具によりキザミを加えている。10は、壺の底部破片である。底部は平底で、焼成前に穿たれた円孔が認められる。11は、高坏の坏部である。坏はやや丸味をもち立ち上り口唇内面を面取りする。内外面ともにヘラミガキ調整痕が残る。12は、高坏の脚部から坏部にかけてのものである。口縁部と脚端を欠く。坏部はやや稜のある立ち上り、ゆるやかに丸味をもたせている。脚部は八字状に大きく外反するもので、脚の中間部に上段3ヶ所、下段3ヶ所の透し孔が設けられる。13は、高坏の脚部である。直線的にハの字状に開く脚で、3ヶ所の透し孔が認められる。14も高坏の脚部破片である。坏部と脚端部を欠くクシ状器具による薄い横線文と3ヶ所の円孔が設けられている。15は、小形の器台である。器受部を反り気味に上方に屈折させている。

本C-SB-1から出土した遺物は甕の端部にキザミを加えたもの1・2、単口縁の丸味をおびた壺3、台付甕の脚台部の脹らみ6、高坏の口端内面の面取りした11、キザミを有するS字甕17、脚部が大きく外反する高坏12など欠山式の要素が見受けられることから、C-SB1の時期は、瓜郷上層第2様式すなわち欠山式土器の時期としてよいであろう。また、埋土中から検出した14についてもこの時期の所産と考える。

2、堅穴住居址C-SB2

(1) 遺構 (挿図第79、図版第41)

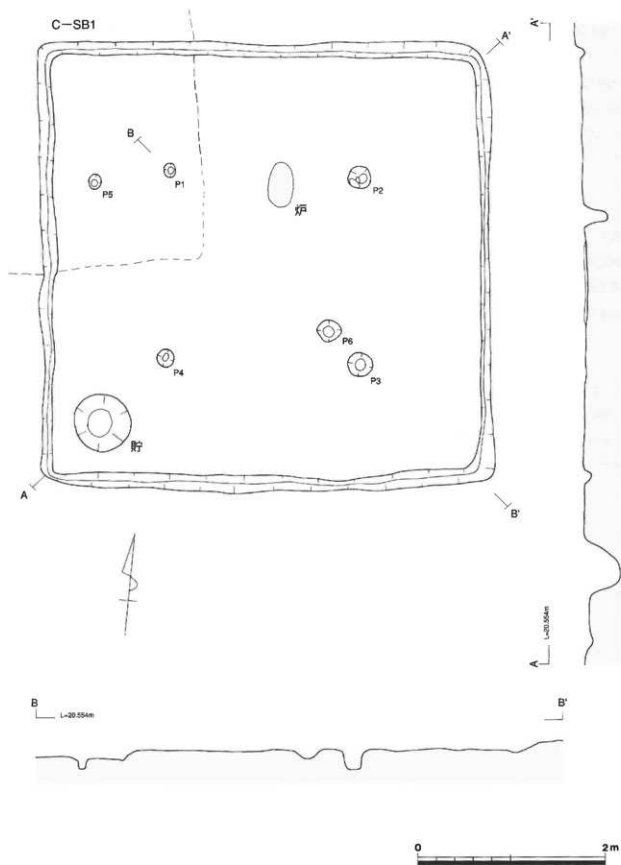
堅穴住居址C-SB2は、C区内の南西に位置する。堅穴住居址C-SB1の南東側の東壁の一部と南壁の一部を切っている。削平面から床面までの深さは8~16cmである。壁溝はすべて巡っている。壁溝の幅は10~20cm、深さ4~10cmである。床面は東西の長さが4.64m、南北の長さが4.50m、面積は約21㎡である。平面形はほぼ正方形である。主軸方位は、N-5°-Wである。柱穴はP1(14×12×11)、P2(27×24×28)、P3(26×24×24)、P4(19×18×11)の4個で、各柱穴間の長さはP1~P2が2.10m、P2~P3が2.00m、P3~P4が2.10m、P4~P1が2.00mである。貯蔵穴は南西隅に認められ、平面形はほぼ円形で、断面形は鍋底形である。その規模は径64cm、深さ40cmである。炉址は中央部やや北寄りに1箇所認められた。

(2) 遺物 (挿図第102の16~21)

18・21はC-SB2の床面から検出された。16・17・19はの堅穴南西隅の貯蔵穴から検出された、また20は、埋土中から見出された。

16~18は、やや厚手の甕のくの字状に外反する口縁部破片である。口端はいずれも丸く仕上げられ無文である。19は、短い頸部の器壁が厚く指痕を口頸部にもつ甕である。20は、高坏の脚部であり坏部と脚端部を欠く。長く柱状を呈した脚部には幅の広いクシ状器具により横線文が施されている。横線下端には3ヶ所の透かし孔が設けられている。21は、高坏の坏部上半を欠失したものである。坏部は皿状の坏底面から稜を有し立ち上がる。脚部は脚の2/3まで柱状を呈し、ここから大きく外反し直線的に脚部に至る

本C-SB2の埋土中から出土した高坏の20は弥生時代後期の寄遣式土器である。その他の遺物は古墳時代中期の青山式土器と考えられる。



挿図第82 竪穴住居址C-SB2実測図

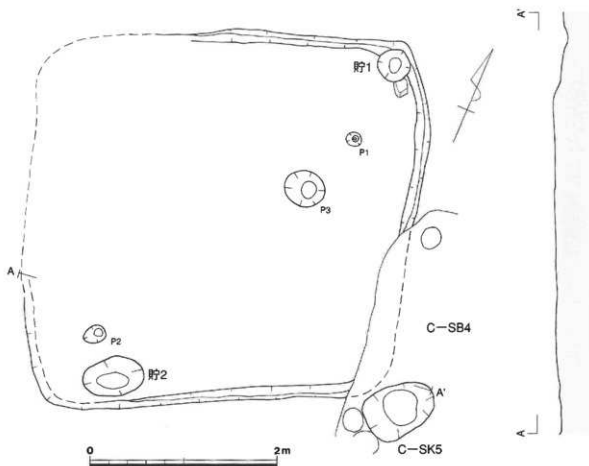
3、竪穴住居址C-SB3

(1) 遺構 (挿図第79、挿図第82、図版第36の2、図版第38の1、図版第40の1)

竪穴住居址C-SB3は、C区内の南西寄り、竪穴住居址C-SB1とC-SB2の北西に位置する。南東隅は竪穴住居址C-SB4に切れ、北西壁と南西壁は工事ににより削平されていた。削平面から床面までの深さは8cmである。壁溝は、削平されたり、切られたりしている箇所を除けば、すべて存在している。壁溝の幅は10~16cm、深さは8cmである。床面は、現状で東西の長さ3.60m、南北の長さ3.80m、面積約4㎡で、平面形はほぼ正方形である。主軸方位は、 $N-20^{\circ}-W$ である。柱穴は推定4個であるがP1(16×16×34)とP2(28×20×20)の2個検出された。貯蔵穴は2箇所ある。貯蔵穴1は北方隅にあり、平面形はほぼ円形で断面形は鍋底形で、その規模は長径36cm、短径34cm、深さ8cmである。貯蔵穴2は南東壁沿いにあり、平面形は楕円形で、断面形は鍋底形をしている。その規模は長径66cm、短径40cmである。炉址は検出されなかった。

(2) 遺物 (挿図第103の22~24)

22~24は、全てC-SB3の床面から検出した遺物である。22は、S字巻の口縁部から上胴部破片である。口端を外反させ内面に平坦面をつくるものである。口縁部にはクシ状器具によるキザミが刻まれ、上胴部には同器具による横線帯が認められる。23は、甕の胴部破片であり、外面に斜位のハケ



挿図第83 竪穴住居址C-SB3実測図

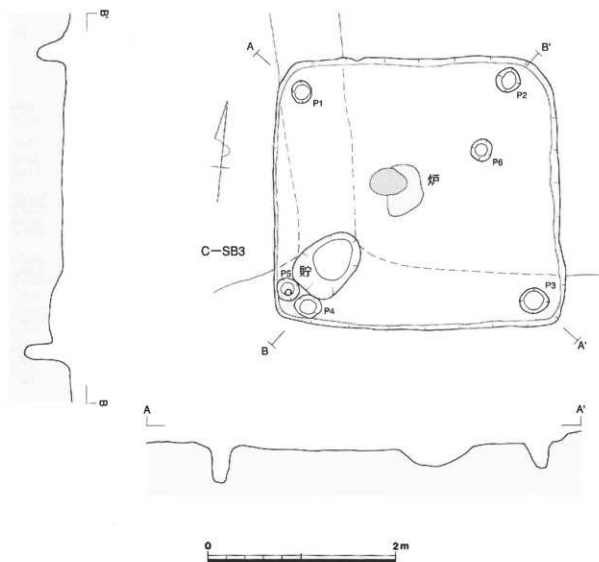
メ痕が認められる。24は、台付甕の脚台部で脚台端に向直線的に開いている。胸端は角張り平坦面をつくっている。

C-SB3は、口縁部にキザミのあるS字甕の22、角張った脚端をもつ台付甕の24などから、C-SB1と同時期、すなわち瓜郷上層第2様式、欠山式土器の時期に営まれたものであろう。

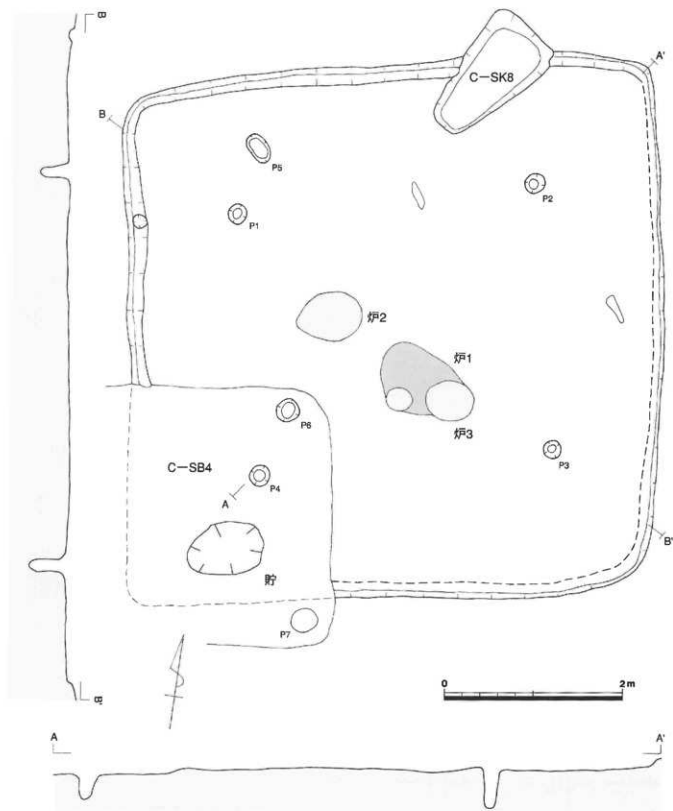
4、竪穴住居址C-SB4

(1) 遺構(挿図第79、挿図第84、図版第36の2、図版第38)

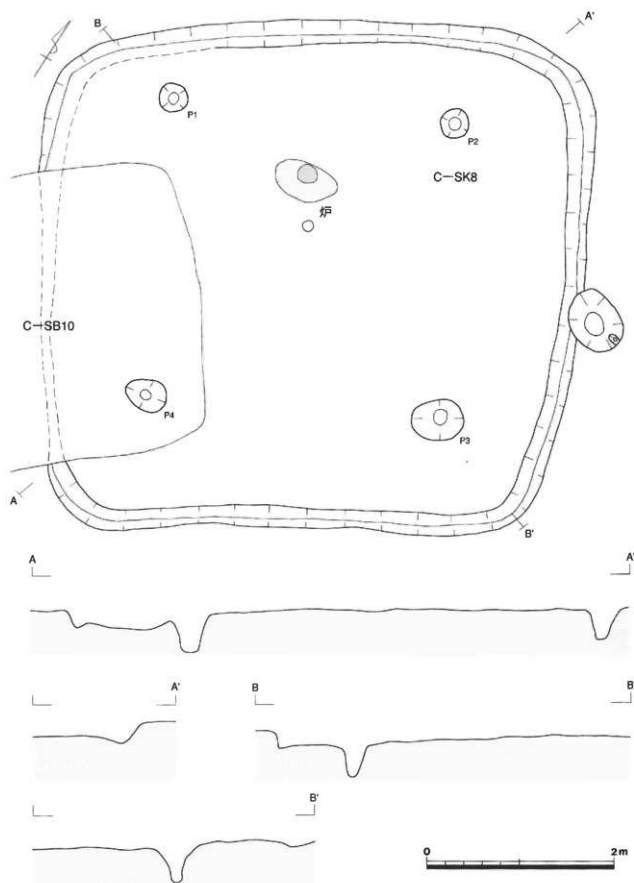
竪穴住居址C-SB4は、C区内の南西に位置し、隣接している2軒の竪穴住居址C-SB3とC-SB5の2軒を切って所在している。削平面から床面までの深さは4~20cmである。壁溝は認められない。竪穴住居址の床面は、東西の長さ2.94m、南北の長さ2.84m、面積約8㎡で、平面形は隅円方形である。主軸方位はN-7°-Wである。柱穴はP1(24×22×38)、P2(28×24×32)、P3(34×



挿図第84 竪穴住居址C-SB4実測図



挿図第85 竪穴住居址C-SB 5 実測図



挿図第86 竪穴住居址C-SB 6 実測図

32×28)、P4 (28×26×30) の4個で、各柱穴間の長さは、P1～P2が2.24m、P2～P3が2.40m、P3～P4が2.40m、P4～P1が2.36mである。貯蔵穴は南西隅に認められ、平面形は倒卵形で、断面形は鍋底形である。その規模は長径81cm、短径67cm、深さ24cmである。炉址は中央部に2箇所認められた。

(2) 遺物 (挿図第103の25・26)

25は、C-SB4の床面、26は、埋土中から検出したものである。25は、鉢の口縁部破片で丸味をおびた体部に、クシ状器具による斜位の刺突文列を施している。口端は、外側につまみ出しており平坦面をつくる。

26は、片面が剥離した塩基性岩の石剣である。

床面から出土した遺物からは時期を特定できなかった。遺構の切り合いはC-SB4がSB-3、SB-5を切ることから、これらより新しい堅穴であろう。また、石器については縄文時代から条痕系土器の時期の所産と考えられる。

5、堅穴住居址C-SB5

(1) 遺構 (挿図第79、挿図第85、図版第36、図版第38の1)

堅穴住居址C-SB5は、C区内の南西端に位置する。堅穴住居址C-SB4に切られ、さらに土壇C-SK8に切られている。削平面から床面までの深さは12cmで、壁溝は北壁と西壁は認められるが、その他の壁では不明である。東西壁の長さは5.90m、南北壁の長さは5.80m、面積は約33㎡である。平面形は隅円方形で、主軸の方位はN-5°-Wである。柱穴はP1 (22×21×56)、P2 (22×19×48)、P3 (20×20×41)、P4 (24×22×28) の4個で、各柱穴間の長さはP1～P2が3.34m、P2～P3が3.08m、P3～P4が3.30m、P4～P3が3.08mである。貯蔵穴は南西隅寄りに認められ、平面形は倒卵形で、断面形は鍋底形である。その規模は長径88cm、短径70cm、深さ20cmである。炉址は3箇所認められた。いずれも住居址の中央部に存在している。

東壁と北壁近くで長さ30cmほどの炭化物が認められた。床面に数cmの炭化物が多く認められている。このことから堅穴住居址は火災を受けているものと推測される。

(2) 遺物 (挿図第103の27)

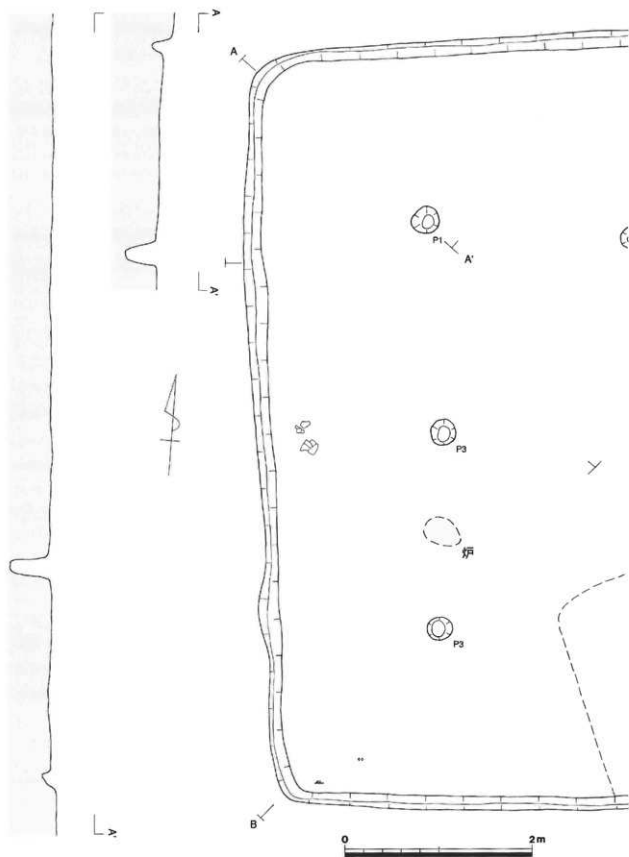
27は、C-SB5の床面から検出したものである。受口状の口縁をもつS字寛の口縁部から上胴部の破片で、頸部はくの字状に折れるがすぐに直上し、口端は面取りされ平坦面をなしている。口縁部は無文だが、上胴部には斜位のハケメを施した後に、クシ状器具による横線文を施している。横線文の下には、同器具による刺突文列が認められる。

C-SB5の床面から出土した遺物は、SB-1と同時期の瓜罫上層第2様式、欠山式土器と考えられる。本堅穴もこの時期に営まれたものであろう。

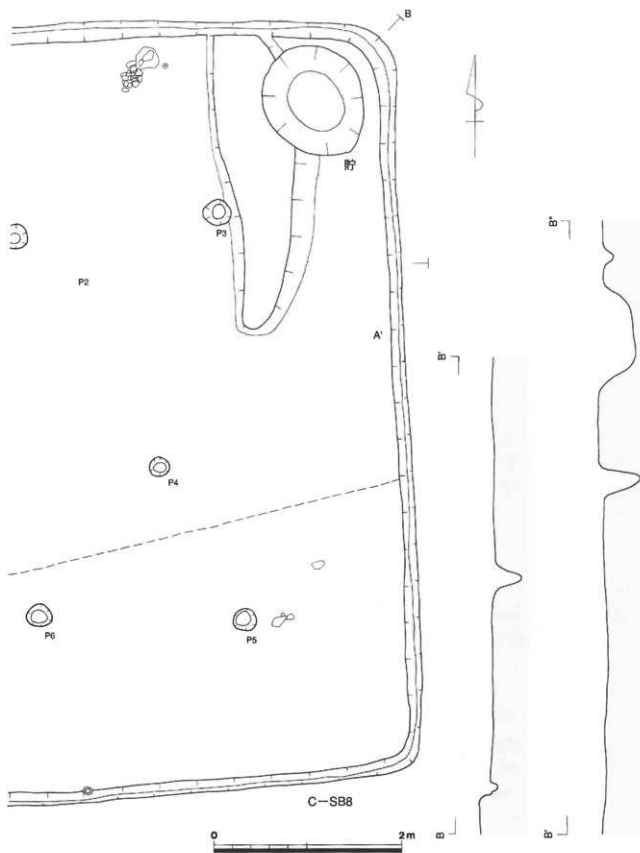
6、堅穴住居址C-SB6

(1) 遺構 (挿図第79、挿図第86、図版第39の2、図版第40、図版第41の2)

堅穴住居址C-SB6は、C区内の西側で、堅穴住居址C-SB1の北側に位置する。東に所在する堅穴住居址C-SB22の南西隅を切り、C-SB10に西壁が切られている。削平面から床面までの



挿図第87 竪穴住居址C-SB7 実測図(1)



挿図第88 竪穴住居址C-SB7実測図(2)

深さは16cmである。竪穴住居址C-SB10によって切られた西壁部分を除くと壁沿いに幅18~30cm、深さ4~6cmの壁溝が認められる。東西壁の長さは5.8m、南北壁の長さは5.30m、床面積約27㎡である。平面形は隅円方形である。主軸方位はN-30°-Wである。柱穴はP1 (31×31×35)、P2 (33×33×34)、P3 (58×46×43)、P4 (44×33×37) の4個で、柱穴間の長さはP1~P2が3.14m、P2~P3が3.20m、P3~P4が3.20m、P4~P1が3.20mである。貯蔵穴は認められない。炉址は1箇所、中央北で検出された。

(2) 遺物 (挿図第103の28・29)

28・29はいずれもC-SB6床面から検出されたものである。28は、壺の底部破片で平底である。29は、高坏の脚部破片で直線的に開き脚端に向かっている。脚端は丸味をもたせ仕上げられている。また脚部には3ヶ所の透かし孔が認められる。

C-SB6は、王江式の時期の竪穴と考えられる。

7、竪穴住居址C-SB7

(1) 遺構 (挿図第79、挿図第80、挿図第87、挿図第88、巻頭図版第5の2、図版第36の1、図版第39の1、図版第42、図版第45の1)

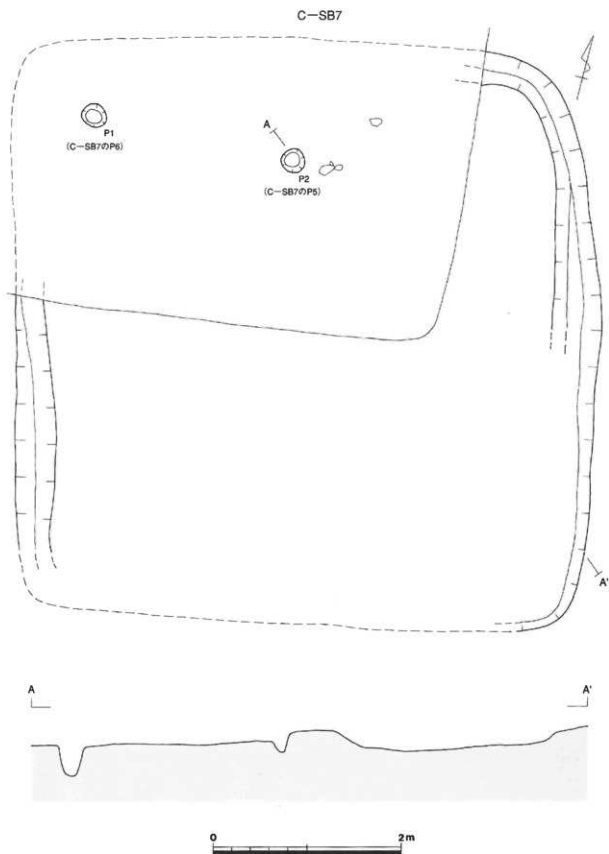
竪穴住居址C-SB7は、C区内の中央に位置する。竪穴住居址C-SB8を切っている。削平面から床面までの深さは、4~14cmである。壁溝はすべて巡らされている。壁溝は幅12~28cmで、深さ10~14cmである。床面は、東西の長さ7.90m、南北の長さ8.12m、面積は約64㎡で、平面形は隅円方形である。主軸方位はN-4°-Wである。柱穴は、P1 (30×28×42)、P3 (30×28×40)、P5 (27×26×38)、P7 (28×26×32) の4個で、各柱穴間の長さは、P1~P3が4.44m、P3~P5が4.44m、P5~P7が4.54m、P7~P1が4.44mである。柱穴P2 (28×26×13)、P4 (24×24×47)、P6 (28×26×15)、P8 (28×28×42) は柱穴の添柱や間仕切り柱として利用されたものであろう。貯蔵穴は、北東隅に構築されており、平面形は楕円形で、断面形は鍋底形であり、規模は長径1.30m、短径1.06m、深さ34cmである。貯蔵穴の手前には、南北に長さ3.30m、幅1.00m、高さ10cmの高まりをもつマウンドが設けられている。炉址は、柱穴P1とP7の間に1箇所認められた。

(2) 遺物 (挿図第103の30~39、図版第47の4、図版第48の6~8)

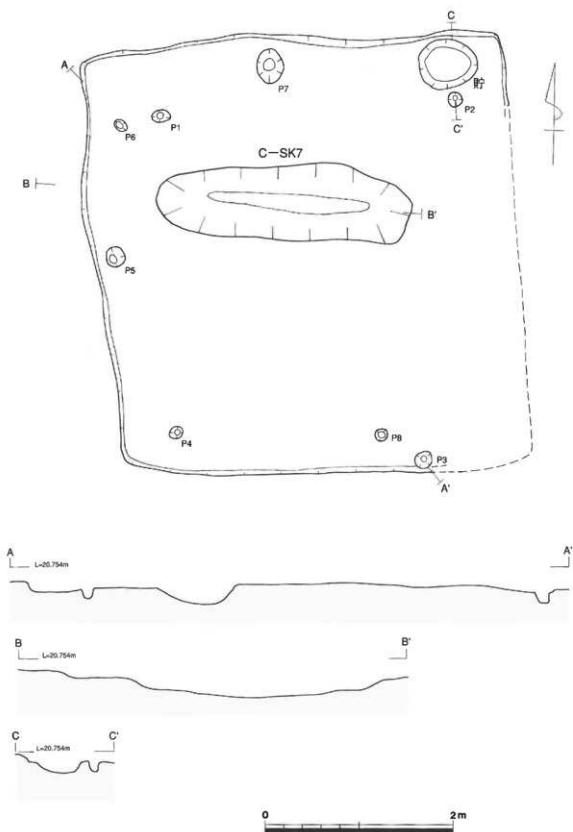
30~38は、全てC-SB7の床面から出土し、39は、埋土中から見出したものである。30は、くの字状口縁をもつ壺の口縁部破片である。口縁部の立ちが短く口端は丸味をもつ。31はS字甕である。口端を折りまげ平坦面をつくっている。口縁にはクシ状器具による斜位の刺突文列を施し、上胴部には斜位のハケメを施している。ここには横線の一部が認められる。32・33は、壺の口縁部である。34・35は、壺の底部である。32は、口縁部が朝顔形に開き口端を上下に拡張してが受口状をなすものである。33は、口縁部が二重口縁をなし強く反り気味な口端は丸く仕上げられ、器壁は厚い。34・35は、平底の底部である。36は、高坏の脚部破片である。脹らみみのあるエンタシス様の管状脚の下方で、外に折れ大きく開く。口端は丸味をもたせ仕上げている。

37・38は、床面から検出した鉄製品である。37は、刀子、38は、鉄鏝と考えられる。

39は、埋土中から検出した安山岩製の凹基無茎鐵である。



挿図第89 竪穴住居址C-SB 8 実測図



挿図第90 竪穴住居址C-SB 9 実測図

本C-SB7の埋土から検出した石鏝は、縄文時代から条痕系土器の使用された時期までの所産と考えられる。また、床面出土のS字口縁甕の31は、王江式土器の段階のもので混入品と考えられる。他の遺物は、本C-SB7が営まれた時期を示すもので、古墳時代中期の青山式土器の時期に比定されよう。また、鉄製品も同時期であろう。

8、竪穴住居址C-SB8

(1) 遺構（挿図第80、挿図第89、巻頭図版第5の2、図版第45の2）

竪穴住居址C-SB8は、C区内の中央南端に位置する。北側は竪穴住居址C-SB7に切られ、南壁は工事により削られている。壁溝は、現存する西壁と東壁の一部では確認することができた。床面は、現状で東西の長さ5.40m、南北の長さ5.90m、面積は約32㎡である。平面形は隅円方形である。柱穴は2個検出されたがP1（28×26×15）とP2（27×26×38）がC-SB7の柱穴ならばC-SB8の床面に柱穴のない可能性がある。床面には柱穴のない竪穴住居址が存在するのかが疑問が残る。今後の類例を待ちたい。貯蔵穴も炉址も検出されなかった。

(2) 遺物（挿図第103の40～46、図版第47の5）

40～46は全てC-SB8の床面から検出した遺物である。40・41は甕の口縁部から上胴部の破片である。いずれもく字状口縁部をもち、40は反り気味に外反し、41は直線的にひらいている。42・43は赤彩が施された壺の胴部破片である。

44・45は高坏の脚部であり、44は坏部と脚端を欠いている。脚は大きく外反して開き、3ヶ所の透かし孔を設けている。45は、脚高の低い小形高坏の脚部である。脚は反り気味に開き、脚端に丸味をもたせている。脚中央には3ヶ所の透かし孔を配しており、高坏のミニチュア製品とも考えられる。46は、小形の鉢の下胴部から底部の破片である。底部は、平底で、下胴部はやや丸味をもつ、下胴部がつく。鉢のミニチュア製品であろう。

本C-SB8は、王江式土器の時期に営まれたと考えられる。

9、竪穴住居址C-SB9

(1) 遺構（挿図第79、挿図第90）

竪穴住居址C-SB9は、C区内の西端に位置する。東壁と南壁の一部は工事により、削られている。住居址内は、土壌C-SK7が設けられている。北壁より1.4m中央寄り、北壁に平行している。この竪穴住居址に関連する掘り込みとも考えられる。壁溝は認められない。床面は東西の長さ4.46m、南北の長さ4.50m、面積は約20㎡である。平面形は正方形である。主軸方位は、N-4°-Wである。柱穴は4個であるが、P1（20×14×10）、P2（16×14×12）、P4（13×6×11）の3個は、柱穴の位置、大きさ、深さから確かである。各柱穴間の長さは、P1～P2が3.20m、P4～P1が3.30mである。貯蔵穴は、北東隅にあり平面形は楕円形で、断面形は鍋底形である。その規模は、長径66cm、短径54cm、深さ24cmである。炉址は検出されなかった。

(2) 遺物

C-SB9からは図示できる遺物は出土していない。また、遺構の切り合いも無く時期を特定でき

る資料に恵まれないが、少量の土師器を検出しているので、古墳時代前期～中期にかけての堅穴と推定できる。

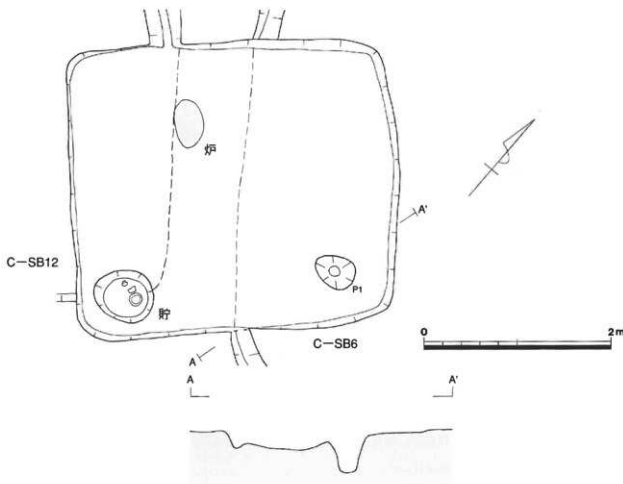
10、堅穴住居址C-SB10

(1) 遺構 (挿図第80、挿図第91、図版第39の2、図版第40、図版第46の1)

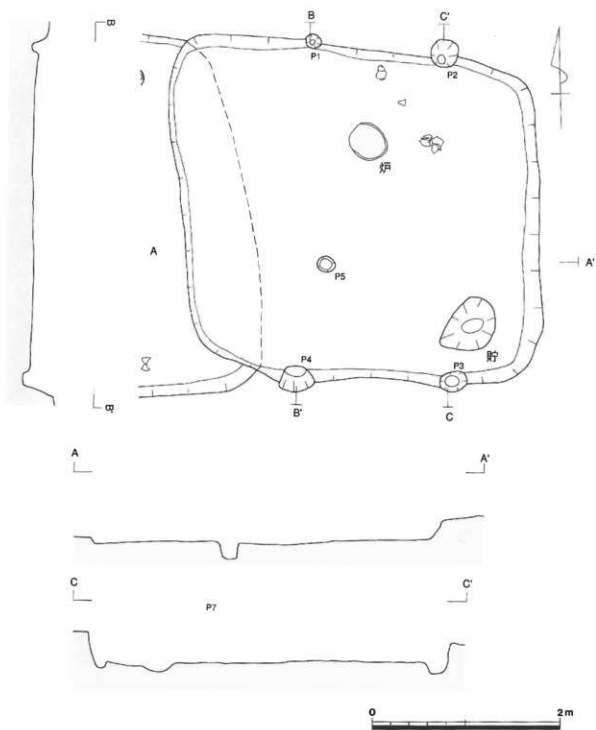
堅穴住居址C-SB10は、C区内の西端に位置する。隣接する2軒の堅穴住居址C-SB6とC-SB12の両軒を切って構築されたものである。削平面から床面までの深さは8～16cmである。壁溝は認められない。床面は、東西の長さ3.30m、南北の長さ3.00m、面積約10㎡である。平面形は南西角と北西角が丸くなっているが、北東角が角張っていることから、ほぼ楕円形と言えよう。主軸方位はN-34°-Wである。柱穴は、P1(44×33×37)の1個のみ検出されたが、他は不明である。貯蔵穴は南西隅に構築され、平面形は楕円形で、断面形は平底形である。その規模は、長径70cm、短径50cmである。炉址は北西側に1箇所認められた。

(2) 遺物 (挿図第103の47・48、挿図第104の49～51)

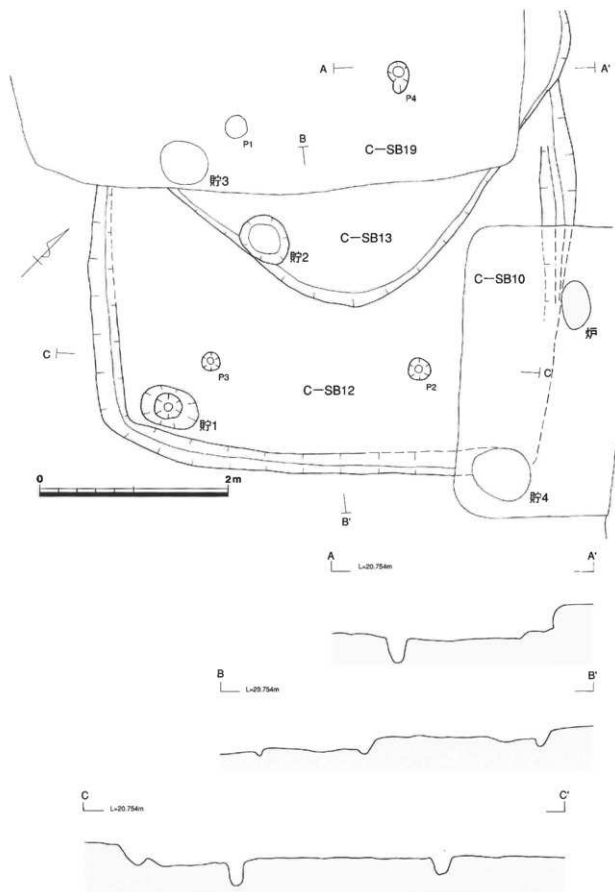
47・48は、C-SB10の南隅の貯蔵穴から検出したものであり、49～51はC-SB10埋土中から見



挿図第91 堅穴住居址C-SB10実測図



挿図第92 竪穴住居址C-SB11実測図



挿図第93 竪穴住居址C-SB12・C-SB13実測図

出したものである。47は、台付甕の脚台部である。脚台部は外面をナデ調整で仕上げている。脚台部の形状は直線的に開きハの字状を呈している。脚台端は丸くつくられている。48は、口縁部を欠失した壺で、球形の体部に平底の底面をもつ。49は、壺の口縁部破片である。口端は丸く仕上げられている。頸部には断面三角形の突帯を付けている。50は、壺の底部である。平底である。51は、高坏の坏部破片で脚部と口縁部を欠いている。坏の下部から口縁部へうつる部分で明瞭な稜をもつ。

本C-SB10の埋土中から出土した、49-51は、王江式土器に比定されるものであり、他からの混入品であろう。また、C-SB10の時期を明らかにする遺物として貯蔵穴から出土した47・48があげられる。これらは、古墳時代中期の青山式土器の時期としてよいであろう。

11. 堅穴住居址C-SB11

(1) 遺構 (挿図第80、挿図第92、図版第42の1)

堅穴住居址C-SB11は、C区内の北端に位置し、堅穴住居址C-SB14の東側を切って構築されている。削平面から床面までの深さは、6~30cmであるが、壁溝は認められない。床面の東西の長さ3.64m、南北の長さ3.36m、面積は約12㎡である。平面形は隅円長方形である。柱穴は明確でない。壁溝に設けられたP1 (16×14×10)、P2 (32×30×16)、P3 (29×23×10)、P4 (40×29×8) はこの堅穴住居址の柱穴であろうか。南東隅には貯蔵穴が認められる。平面形は不整形で、鍋底形をしており、その規模は長径68cm、短径50cm、深さ18cmを測る。炉址は住居址内の北側中央に1箇所認められる。

(2) 遺物 (挿図第104の52~62、図版第47の6、図版第48の9)

52・53・55~58・60・61は、C-SB11の床面から検出したものである。54はC-SB14と接する地点から検出した。59・62は、C-SB11の埋土中から見出したものである。52~55は、甕である。52・53は、くの字状口縁をもつものである。52は、胴張りの体部で口縁部はやや外反気味に開き口端に丸味をもつ。53は口端を欠く。54は、上胴部の破片で肩部にクシ状器具による刺突文列を配している。55は、台付甕の脚台部であり直線的に開く脚端は丸味をもつ。56は、広口の壺である。朝顔形に開く口頸部をもち口端を丸く仕上げている。57は、壺の下胴部破片と考えられるもので外面に赤彩を施している。59・60は、高坏の脚部である。59は、脚端を欠くもので、脚はハの字状に大きく開き3ヶ所に透かし孔を施している。60は、小形の高坏の脚部と考えられる。透かし孔をもたずハの字状に開く形状である。58は、鉢である。口縁が折れ体部は浅くつくられる。底部は丸底で、底面に小指大の凹みがある。61は、壺の蓋と考えられる土製品である。中央には摘み部が剥落したと考えられる痕があり、摘み部の両側に2孔2組の小さな円孔が認められる。

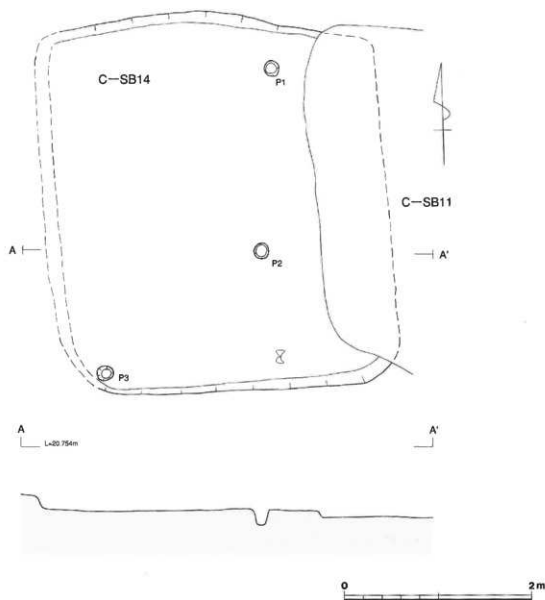
62は、凝灰岩製の砥石である。細長い円礫の4面に砥面をもち、一面に2条の断面V字状の鋭い砥面が平行して残る。細い金属製品を砥いだものと考えられる。

本C-SB11は、床面上に出土した遺物から欠山式土器の時期の堅穴と考えられる。また、埋土中から検出した59・62もこの時期としてよいであろう。54については、C-SB11によって切られた、C-SB14の遺物である可能性が考えられる。

12、竪穴住居址C-SB12

(1) 遺構 (挿図第79、挿図第93、図版第39の2、図版第40)

竪穴住居址C-SB12は、C区内の西側の端に位置する。竪穴住居址C-SB10、C-SB13、C-SB19の3軒に切られている。削平面から床面までの深さは14cmで、現存する東壁、南壁、西壁には壁溝が認められる。床面は東西の長さ4.60m、南北は不明である。平面形は隅円方形または隅円長方形であろうか。主軸方位はN-43°-Wである。柱穴は推定4個であるが、P1 (28×24×-)、P2 (23×23×14)、P3 (20×20×27)、の3個が検出された。貯蔵穴は南隅にあり、平面形は依形で、断面形は鍋底形である。規模は長径64cm、短径47cm、深さは28cmである。炉址は柱穴P3の北側で検出



挿図第94 竪穴住居址C-SB14実測図

したと記録してあるが、実測図には記載されていない。また、南隅に長さ30cm程の炭化物が検出されており、火災を受けた可能性を伺わせる状態であった。

(2) 遺物 (挿図第104の63・64)

64・63はいずれもC-SB12埋土中から見出したものである。

63は、大形の壺の胴部破片である、内外面ともにハケメ調整痕を残す。

64は、凝灰岩の敲石であり先端部に敲打痕が認められる。

本C-SB12からは時期を明らかにする遺物は検出されなかった。遺構の切り合いからC-SB12は、C-SB13・C-SB19に切られており、古墳時代前期に営まれた堅穴としてよいであろう。

13、堅穴住居址C-SB13

(1) 遺構 (挿図第79、挿図第93、図版第39の2、図版第40の2)

堅穴住居址C-SB13は、C区内の最も西端に位置する。大半を堅穴住居址C-SB19によって切られている。また、堅穴住居址C-SB12を切っている。壁溝は認められない。床面は東西は不明、南北の長さ4.26mである。平面形は隅円方形または隅円長方形であろう。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南壁に接しており、平面形は楕円形で、断面形は平底形である。規模は長径54cm、短径47cmである。炉址は検出されなかった。

(2) 遺物

本C-SB13からは、図示できない土師器の破片が少量出土している。切り合い状態は、C-SB12を切り、C-SB19によって切られている。C-SB13は、古墳時代前期に営まれた可能性が高い。

14、堅穴住居址C-SB14

(1) 遺構 (挿図第79、挿図第94、図版第42の1)

堅穴住居址C-SB14は、C区内の北端に位置し、堅穴住居址C-SB11により東側が切られている。削平面から床面までの深さは20cmである。壁溝は認められない。主軸方位はN-5°-Wである。床面は東西の長さは不明、南北の長さ3.92mを測る。住居址内にP1 (17×16×-)、P2 (16×16×16)、P3 (17×14×-) の柱穴が検出されたが、この住居址の柱穴にあたるのはどれか断定しかねる。貯蔵穴と炉址はともに検出されなかった。

(2) 遺物 (挿図第104の66・67)

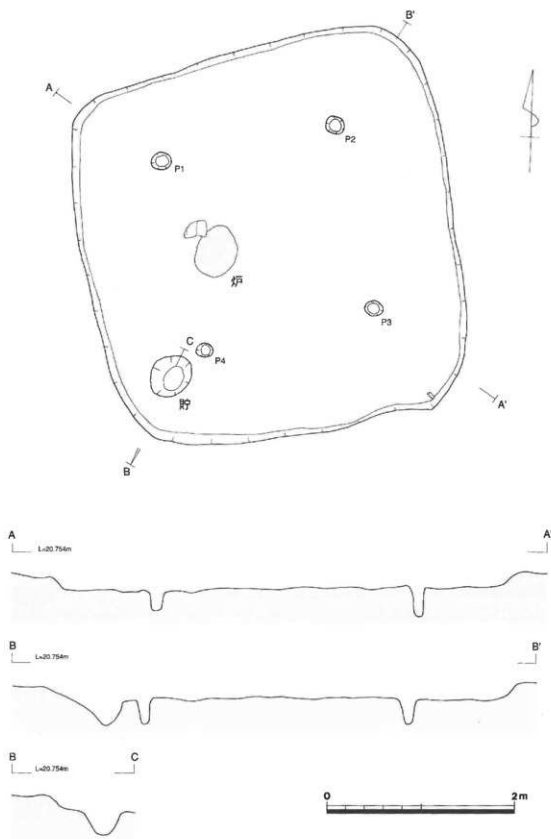
65・66は、いずれもC-SB14の床面から検出したものである。65は、くの字状口縁をもつ甕の口縁部である。やや丈の高い口縁部に丸味をおびた口端をもつ。66は、S字甕の口縁部で、屈曲した内面にハケメ調整痕を残し、口端は丸味をもたせている。

本C-SB14の時期は、王江式土器の時期と考えられるが、東側にC-SB14を切る同時期のC-SB11が存在する。同一時期内に堅穴が建て替えられた可能性が強いと思われる。

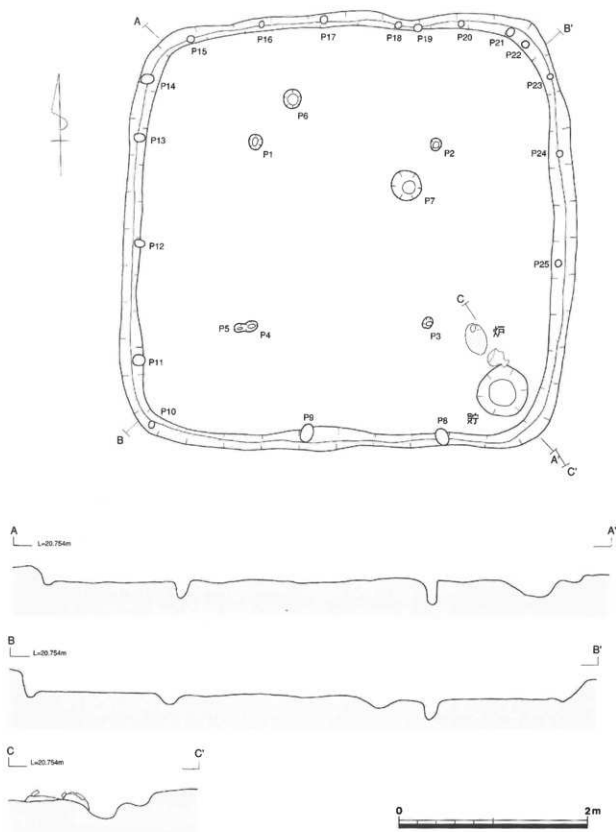
15、堅穴住居址C-SB15

(1) 遺構 (挿図第80、挿図第95、図版第43)

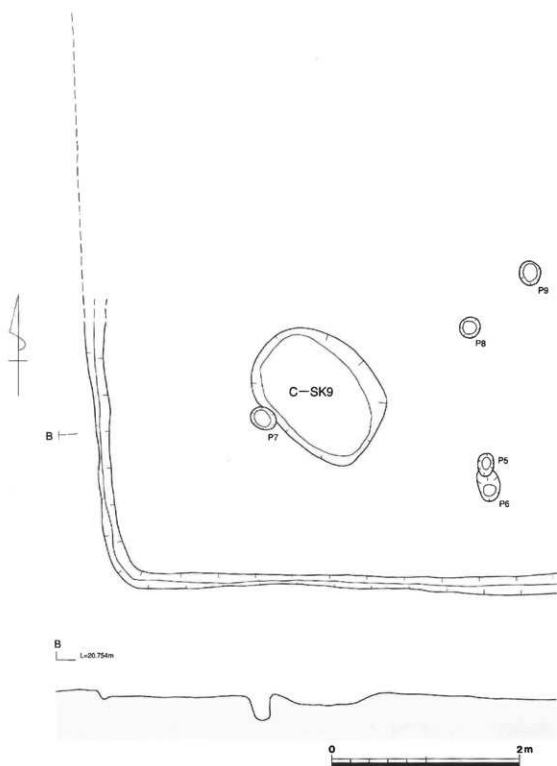
堅穴住居C-SB15は、C区内の中央東側に位置する。削平面から床面までの深さは20cmである。



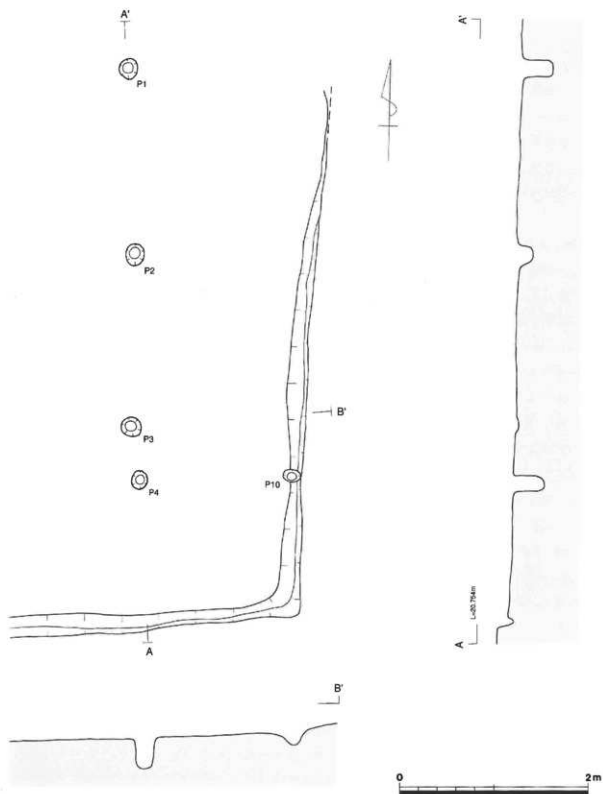
挿図第95 竪穴住居址C—SB15実測図



挿図第96 竪穴住居址C-SB16実測図



挿図第97 竪穴住居址C-SB17実測図(1)



挿図第98 竪穴住居址C-SB17実測図(2)

東西壁の長さは3.92m、南北の長さは4.06m、面積は約15㎡である。平面形は隅円長方形である。壁溝は認められない。主軸方位は $N-10^{\circ}-W$ である。柱穴はP1 (22×19×30)、P2 (19×18×25)、P3 (19×16×21)、P4 (17×13×28)の4個で、各柱穴間の長さは、P1～P2が1.84m、P2～P3が2.10m、P3～P4が1.86m、P4～P1が2.10mである。貯蔵穴は南西隅にあり、平面形は楕円形で、断面形は鍋底形である。規模は長径50cm、短径40cm、深さ27cmである。炉址は中央西寄りに1箇所認められた。

(2) 遺物

C-SB15からは、土師器の小片が出土したのみで図示できるものではなく、時期を明らかにすることはできなかった。また、遺構の切り合いもない。しかし、小形で南西に貯蔵穴をもつ同タイプのもの、C-SB1～C-SB4、C-SB10～C-SB12などがある。したがって本C-SB15も古墳時代前期に属すると考えてよいであろう。

16 竪穴住居址C-SB16

(1) 遺構 (挿図第79、挿図第96、図版第44の1、図版第45の1・2)

竪穴住居址C-SB16は、C区内東寄りに位置する。削平面から床面までの深さは8～24cmである。すべての壁に壁溝が認められる。この壁または壁溝に18本の小柱穴が認められた。小柱穴のうちP10～P25の16個は長径が6～18cmであるが、南壁には、P8 (20×14×-)とP9 (20×14×-)のやや大きめの小柱穴が認められた。柱穴間の長さは1.34mとなっており、入口などの施設が想定される。床面は東西の長さ4.46m、南北の長さ4.40m、面積約20㎡である。平面形は隅円方形である。主軸方位は $N-8^{\circ}-E$ である。主柱穴はP1 (16×9×16)、P2 (12×12×21)、P3 (11×7×18)、P4 (13×11×8)の4個で、柱穴間の長さは、P1～P2が2.00m、P2～P3が2.00m、P3～P4が1.94m、P4～P1が2.00mである。貯蔵穴は、南東隅にあり、平面形はほぼ円形で、断面形は平底形である。規模は長径55cm、短径54cm、深さ14cmである。炉址は貯蔵穴と柱穴P3の間に認められた。

(2) 遺物 (挿図第105の67～70、図版第45の1・2、図版第47の7・8)

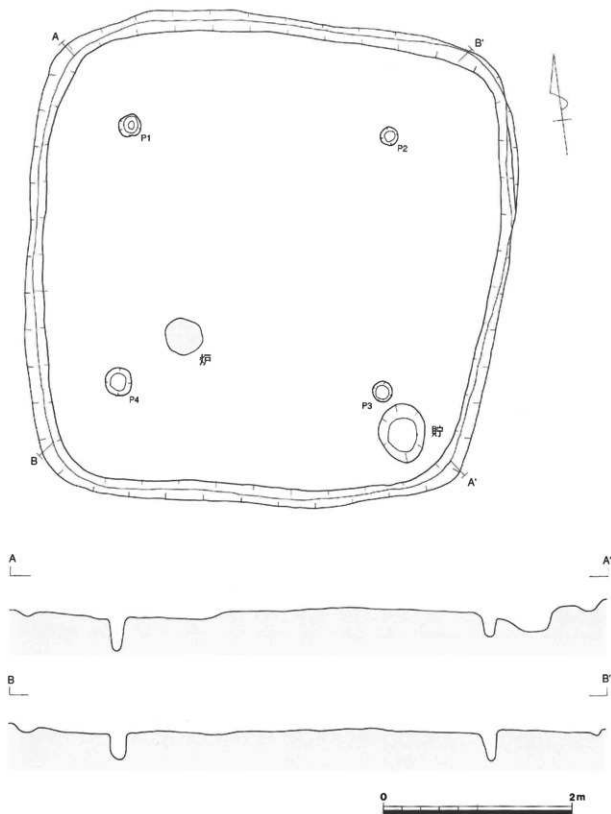
67・69・70は、C-SB16の床面から検出した遺物である。68は埋土中から見出したものである。67は、台付甕の下胴部から脚台部までの破片である。やや反り気味に開く脚台をもち、脚台端に丸味をもたせる。脚部にはナデ調整を行った後に、脚の約1/2上半に縦位の粗いハケメ調整痕が残る。68は、壺の胴部破片である。69・70は、高坏の脚部であり、いずれも坏部と脚端を欠いている。外面はナデ調整で、3ヶ所の通し孔が設けられている。69は、小形の高坏である。なお、竪穴南東隅の貯蔵穴と炉址の間に、くの字状口縁をもつ台付甕が検出された。この台付甕はもろい為にと土ごと採取したが復元できなかった。現地での計測では器高約22cm、器高約16cm、胴径約20cm、脚高さ約5cm、脚台径約7cmであった。形状は図版第45の1・2を参照されたい。

本C-SB16は、王江式土器の時期に営まれたと考える。

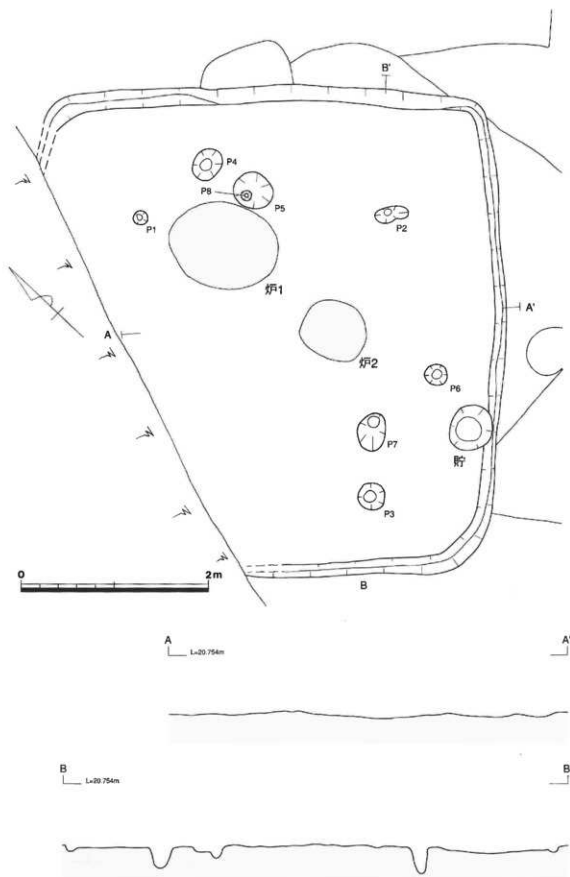
17、竪穴住居址C-SB17

(1) 遺構 (挿図第80、挿図第97、挿図第98、図版第44の2、図版第45の1)

竪穴住居址C-SB17は、C区内の東寄りの北端に位置する。北側半分は工事のため削平され欠損



挿図第99 竪穴住居址C-SB18実測図



挿図第100 竪穴住居址C-SB19実測図

している。削平面から床面までの深さは6~22cmである。現存する壁面には壁溝が巡っている。平面形は南西隅と南東隅から想定すると方形または長方形である。床面は東西の長さ7.40m、南北は不明である。C区ではC-SB7に次ぐ大きなものである。主軸方位は真北である。柱穴はP1 (21×20×32)、P2 (24×21×13)、P4 (19×17×32)、P7 (24×24×30) であろう。各柱穴間の長さは、P1~P2が2.00m、P2~P4が2.50m、P4~P7が4.50mである。柱穴の大きさや深さからP3 (30×25×36)、P5 (27×17×21)、P6 (39×24×21)、P8 (24×24×22)、P9 (27×24×20)、は間仕切り柱か補助柱の柱穴の可能性がある。貯蔵穴は南西寄りにあり、平面形は依形で、断面形は平底形である。その規模は長径1.56m、短径1.10m、深さ14cmである。炉址は検出されなかった。

(2) 遺物 (挿図第105の71~75、図版第48の1)

71~75は、全てC-SB17の床面から検出したものである。

71は、台付甕の脚台部破片で、やや厚手の器壁をもち外面はナデ調整により仕上げている。脚台は直線的に開き、脚台端は面取りして平坦面をつくる。72~73は、壺である。72は、小形の底部が平底をもつ壺である。丸味をもたせた胴部から、くの字状に立ち上る口縁部がつくものと考えられる。74もこの壺とはほぼ同大の、底が平底をなす壺であろう。73は、大形の壺の底部破片で平底である。75は、高坏の脚部である。柱状の脚が3/4下った所に梗をもち大きく開き、丸味をもった脚端に至るものである。折れ曲る部分には、クシ状器具による薄い横線帯が認められる。

本C-SB17は、床面から出土した遺物から古墳時代中期の青山式土器の時期と考えられる。

18、竪穴住居址C-SB18

(1) 遺構 (挿図第79、挿図第99)

竪穴住居址C-SB18は、C区内の東端に位置する。削平面から床面までの深さは12~24cmである。壁溝はすべて巡っており、幅14~24cm、深さ6~14cmである。床面は東西の長さ4.84m、南北の長さ4.90m、面積約24㎡である。平面形は隅円方形である。主軸方位はN-14°-Eである。柱穴はP1 (18×18×35)、P2 (22×22×34)、P3 (21×21×23)、P4 (26×26×26) の4個で、各柱穴間の長さは、P1~P2が2.80m、P2~P3が2.80m、P3~P4が2.84m、P4~P1が2.80mである。貯蔵穴は南東隅にあり、平面形は楕円形で、断面形は鍋底形をしている。その規模は長径66cm、短径60cm、深さ24cmである。炉址は柱穴P2とP4の間のP4寄りに認められた。

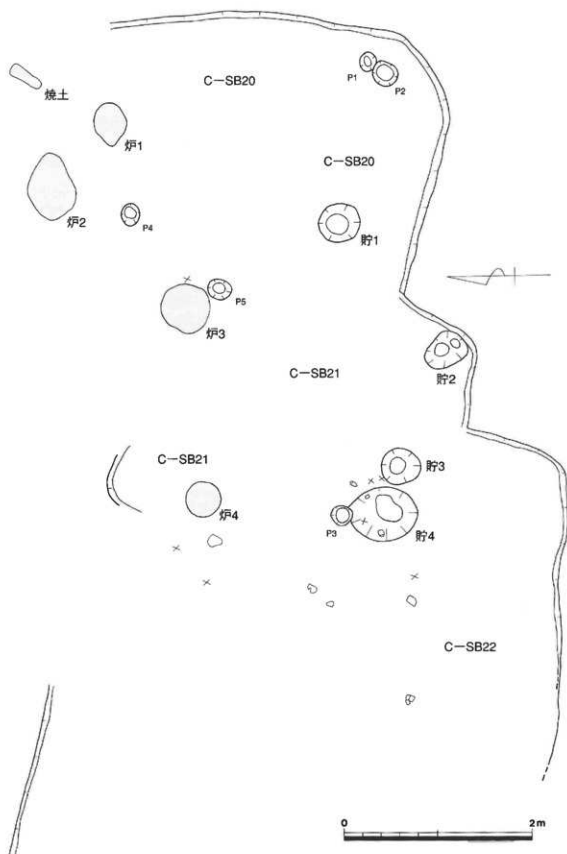
(2) 遺物 (挿図第105の76~80)

76~79は、本C-SB18の床面から検出し、80は埋土中から見出した。

76・77は、壺の口縁部破片である。78は、底部である。76は、口縁内面が受口状に反り、この面にクシ状器具による羽状文帯を施している。口縁部にはクシ状器具による横線を施した後に、3本の棒状浮文を付けている。76は、二重口縁をもつ無文の口縁部である。79は平底の底部である。79は、高坏の坏部である。やや脹らみをもち大きく開く坏部である。

80は、鉄製品で、鉄鏃であろう。

C-SB18は、古墳時代前期の王江式土器の時期に営なまれたと考えられる。



挿図第101 竪穴住居址C-SB20・C-SB21・C-SB22実測図

19、竪穴住居址C-SB19

(1) 遺構 (挿図第79、挿図第100、図版第39の2、図版第40の2)

竪穴住居址C-SB19は、C区内の西端に位置する。西側は工事により削平され、西壁は竪穴住居址C-SB12、C-SB13を切っている。削平面から床面までの深さは2~10cmである。平面形は、残存する北西隅、北東隅、南東隅の現存する両壁の幅から考えると長方形である。主軸方位はN-47°-Eである。柱穴は推定4個であるが、P1(15×15×15)、P2(22×17×52)、P3(24×20×44)の3個検出された。柱穴間の長さは、P1~P2が2.66m、P2~P3が3.10mである。南西隅の柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は南東壁を掘り込んでつくられており、平面形はほぼ円形で、断面形は鍋底形である。その規模は長径50cm、短径46cmでほぼ円形である。炉址は、中央北側と中央東側の2箇所で見出された。

(2) 遺物 (挿図第105の81~83)

81~83は、全てC-SB19の床面から検出した遺物である。81は、くの字状口縁をもつ甕の口縁部破片であり、口端はナデ調整により平坦面をつくっている。82・83は、平底の壺の底部である。外面には底面近くまでハケメ調整の痕が残る。

本C-SB19の時期は、王江式土器の時期に比定されるものである。C-SB12はC-SB13を切り、C-SB13はC-SB19を切っている。東から西へと建て替えられていったものであろう。

20、竪穴住居址C-SB20、C-SB21、C-SB22

(1) 遺構 (挿図第79、挿図第101)

いずれもC区内の中央に位置する。3軒とも切り合っているが、切り合いからの新古関係は不明である。いずれの竪穴住居址も北側部分は、工事により削平されて欠損している。削平面から床面までの深さは、10cmである。壁際は現状ではいずれも認められない。床面の東西、南北の幅は両壁が存在しないためいずれも計測できなかった。主軸方位はいずれも計測できなかった。柱穴は、C-SB20は、P2(27×26×6)が1個、C-SB21は、P4(24×19×11)とP6(50×40×22)の2個検出されたが、C-SB22は1個も検出されなかった。貯蔵穴はC-SB20で1箇所、C-SB21とC-SB22で3箇所検出された。貯蔵穴1の平面形は楕円形で断面形は鍋底形である。貯蔵穴2、貯蔵穴3、貯蔵穴4は楕円形である。断面形は貯蔵穴3、貯蔵穴4は鍋底形をしているが、貯蔵穴2は2箇所の掘り込みをもっている鍋底形である。いずれもその規模は、貯蔵穴1(44×35×27)、貯蔵穴2(50×40×22)、貯蔵穴3(42×40×20)、貯蔵穴4(73×60×12)である。炉址は、C-SB20は3箇所、C-SB21は2箇所で見出されたが、C-SB22では検出されなかった。

(2) 遺物 (挿図第105の84~93、図版第48の2)

A C-SB20

土師器の破片は出土したが、図示できるものがなかった。

B C-SB21 (挿図第105の84~86)

84~86は、C-SB21南東隅に見出した貯蔵穴内から検出した遺物である。84は、壺の口縁部破片であり、口端面取し角張る。85は、壺の底部であり床面に凹みをもつ。86は、高坏の脚部破片で

ある。エンタシス状に膨らみをもつ脚の約1/4下方で大きく直線的に開き丸味をもたせた脚端に至る器形をもつ。

本C-SB21の東側にはC-SB20、西側にはC-SB22が存在する。遺構検出面が浅く、切り合い状態は、不明である。

竪穴から出土した遺物は、古墳時代中期の青山式土器として良いであろう。

C C-SB22 (挿図第105の87~93)

87~93は、全てC-SB22の床面から検出したものである。87・88は、壺の口縁部破片である。87は、直行する口縁部に丸味をもたせた口端をもつもので、口端にはクシ状器具によるキザミが施されている。88は、やはり直行する口縁部にやや外反する口端をもち、内面にはクシ状器具による羽状文を施している。89・90は平底の底部である。91は、高坏の坏部破片で、皿状の下部から口縁部をつくり出す部分に明確な稜をもつ。92は、やや膨らみのある柱状の脚部破片である。93は、甕の口縁部から下胴部にかけてのものである。くの字状口縁部をもち、口縁はやや外反して立ち上がる。口端はナデ調整で丸味をもたせ仕上げている。外面は指痕の残るナデ調整で仕上げ、内面にはハケメ痕が残る。

本C-SB22の出土遺物は、古墳時代中期の青山式土器で、C-SB21と同時期と考えられる。竪穴の切り合いは不明であるが、C-SB20~C-SB22は、同時期に建て替えられた可能性が考えられる。

第2節 土塋

C区内で検出された土塋(C-SK)は6基であるが、いずれも遺物はなく、時期は不明である。

1、土塋C-SK1 (挿図第80)

土塋C-SK1は、C区内の中央より西寄りに所在し、竪穴住居址C-SB6の3.2m北に位置する。平面形は楕円形で規模は長径2.54m、短径1.26mである。長軸はN-69°-Wである。

2、土塋C-SK2 (挿図第80)

土塋C-SK2は、土塋C-SK1より北に1mの所に位置する。平面形は倒卵形で、規模は長径2.34m、短径1.50mである。長軸はN-52°-Eである。

3、土塋C-SK3 (挿図第80)

土塋C-SK3は、C区内の南西端にあり、竪穴住居址C-SB1の南西隅に位置する。平面形はだるま形をしており、断面形は平底形である。その規模は長径86cm、短径68cm、深さは11cmである。長軸はN-80°-Eである。

4、土塋C-SK4 (挿図第80)

土塋C-SK4は、C区内の中央西寄りの竪穴住居址C-SB6の東壁と切り合って所在する。平面形は倒卵形で、断面形は鍋底形である。その規模は長径70cm、短径54cm、深さは20cmである。長軸

はN-50°-Wである。

5、土坑C-SK 7 (挿図第80)

土坑C-SK 7は、C区中央南寄りの竪穴住居址C-SB 9の中央部に位置している。平面形は、長楕円形で、断面形は鍋底形を呈する。その規模は長径2.70m、短径0.82m、深さは22cmである。長軸はN-89°-Wである。

6、土坑C-SK 8 (挿図第80)

土坑C-SK 8は、C区中央部に位置し、竪穴住居址C-SB 5の北壁と切り合っている。平面形は長脚台形で、規模は長径1.50m、短径0.75mである。長軸はN-40°-Eである。

第3節 遺物包含層

遺物は黒色有機土層と耕作土層に包含されている。黒色有機土層から検出された遺物のうち、遺構にともなわない遺物は黒色有機土層出土遺物とした。耕作土層から検出された遺物は表採遺物とした。

1、黒色有機土層出土遺物 (挿図第106の94~107)

94~98は、甕である。94は、くの状口縁をもつもので口頸部が長く反りをもち口端は丸味をおびる。95は、口端を面取りし平坦面をつくり出している。96は、S字甕の口縁部から上胴部の破片で、大きく開く口縁部に丸味をもたせた口端をつくり出している。上胴部にはクシ状器具による横線文を施し器壁は薄い。97・98は、台付甕の脚台部である。いずれも直線的に開く脚台に丸味をもった脚台端がつき、外面はハケメ調整痕が全面に認められる。これらは、古墳時代前期の王江式土器の段階に比定される。99~101・104・105は、壺である。99は、外反する口縁部で口端を上下に拡張させている。100は、口縁をもつ「柳ヶ坪型壺」の口縁部である。内外面にクシ状器具による羽状文を施している。104・105は、有段口縁をもつ壺の口縁部である。104は、頸部に断面三角状の稜が認められる。101は、平底の底部である。これらは王江式土器から青山式土器の様相をもつものであろう。102・103は、高坏の坏部と脚部である。102は、やや外反気味に反る坏部で坏高は高い。口端は丸く仕上げられている。103は、やや外反する脚部で脚端は面取りして平坦面をつくり出している。外面には薄いクシ状器具による横線文が施され、3ヶ所に透し孔が設けられている。これらは、瓜塚上層第3様式すなわち王江式土器と考えられる。

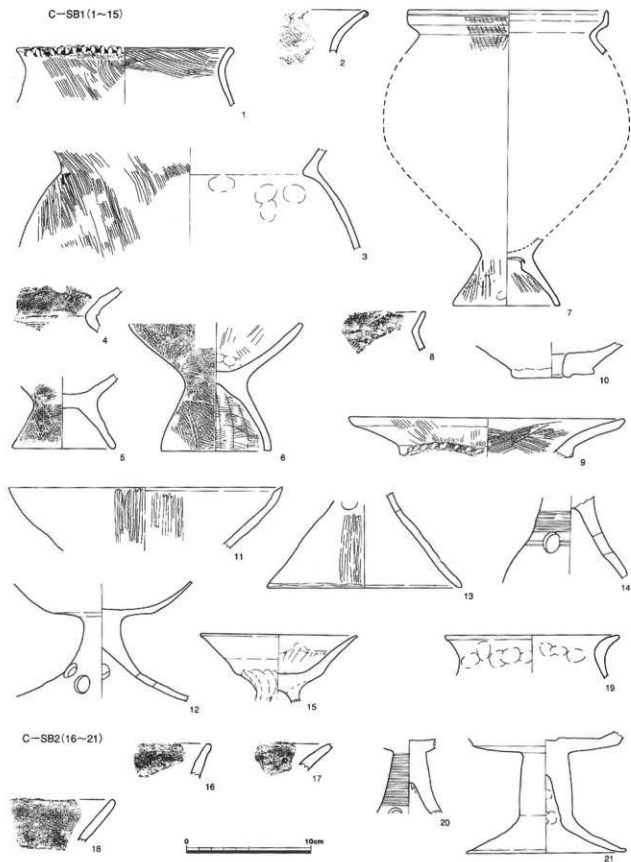
106は、凝灰岩製の砥石で、2ヶ所に砥面が認められる。

107は、鉄鏃である。

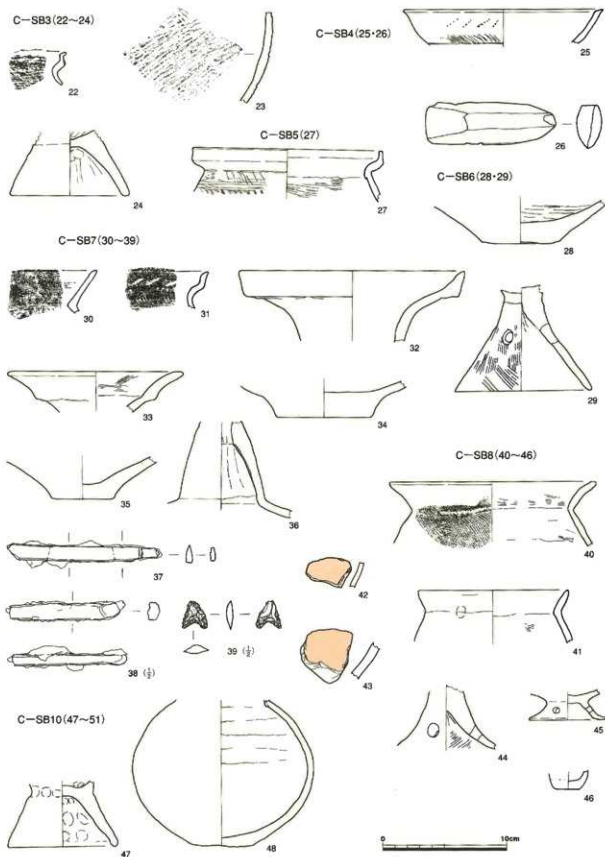
2、表採遺物 (挿図第106の108~115、図版第48の3・4)

108は、S字甕の口縁部から上胴部にかけての破片である。大きく開く口縁部に丸く仕上げられた口端がつくものである。109も同じくS字甕の口縁部破片である。110は、台付甕の脚台部であり、内

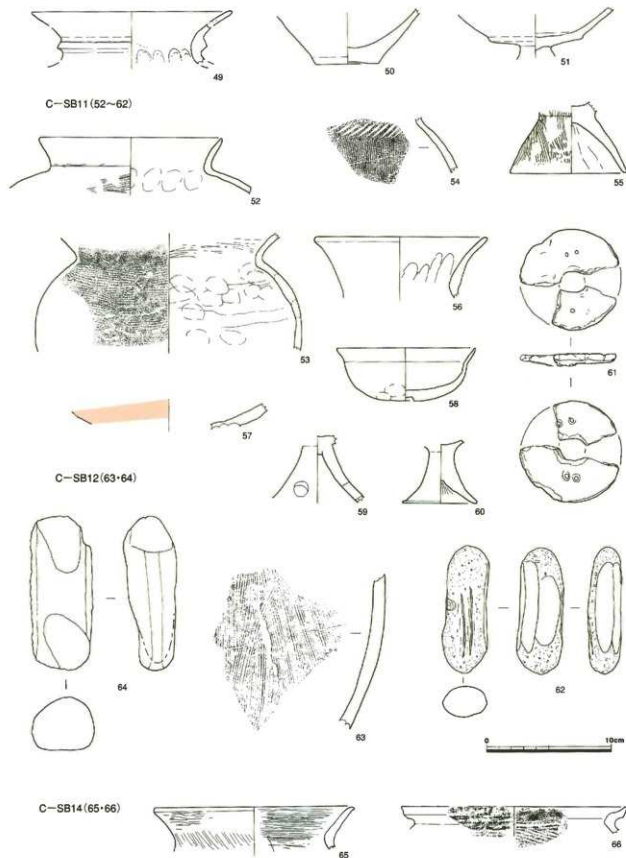
彎した脚に、面取りして平坦面をつくり出した脚端をもつ。S字堯については王江式土器の時期に比定されよう。111～113は、壺である。111は、大きく外反した口縁をもつ壺の口縁部破片である。112は、壺の上胴部破片であり、外面にクシ状器具による横線文を施している。112・113は、壺の下胴部破片である。下長山式あるいは長床式土器と考えられる。114は、高坏の脚部である。脚端を欠き脚はやや外反する。王江式土器の段階に比定されよう。115は、高坏の脚下半部である。稜をもち大きく開く脚である。古墳時代中期の青山式土器の時期であろう。



挿図第102 C区出土 遺物実測図1 (SB1・SB2)

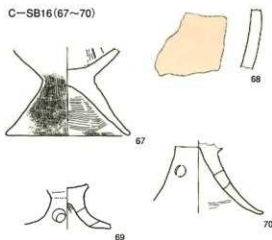


挿図第103 C区出土 遺物実測図2
(SB3・SB4・SB5・SB6・SB7・SB8・SB10)

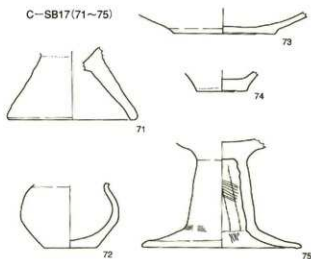


挿図第104 C区出土 遺物実測図3 (SB10・SB11・SB12・SB14)

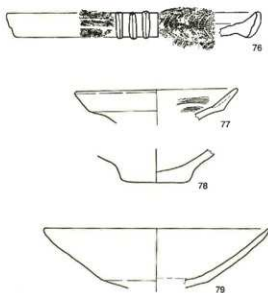
C-SB16(67~70)



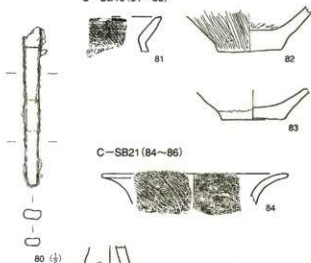
C-SB17(71~75)



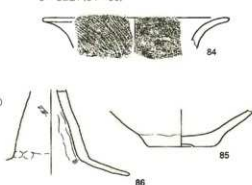
C-SB18(76~80)



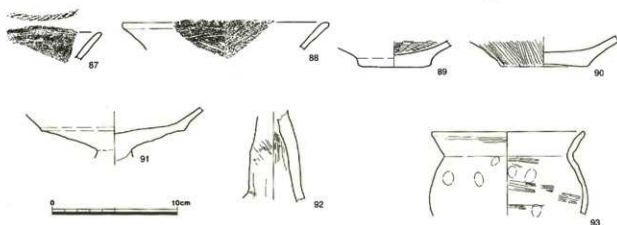
C-SB19(81~83)



C-SB21(84~86)

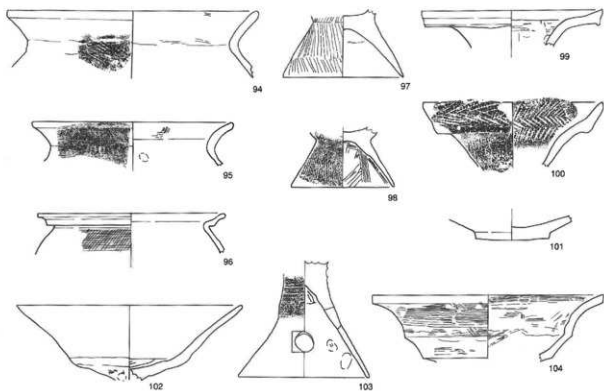


C-SB22(87~93)

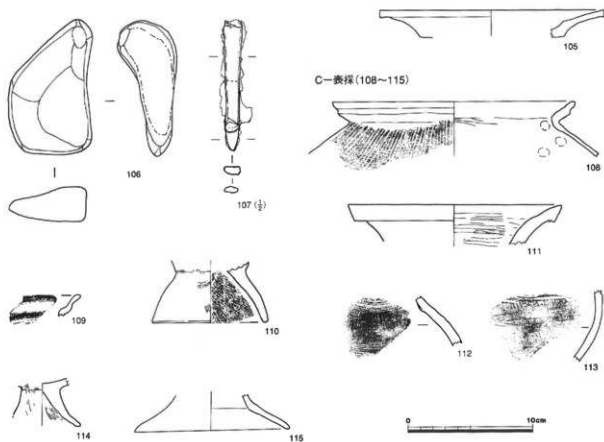


挿図第105 C区出土 遺物実測図4 (SB16・SB17・SB18・SB19・SB21・SB22)

C—黒色有機土層(94~107)



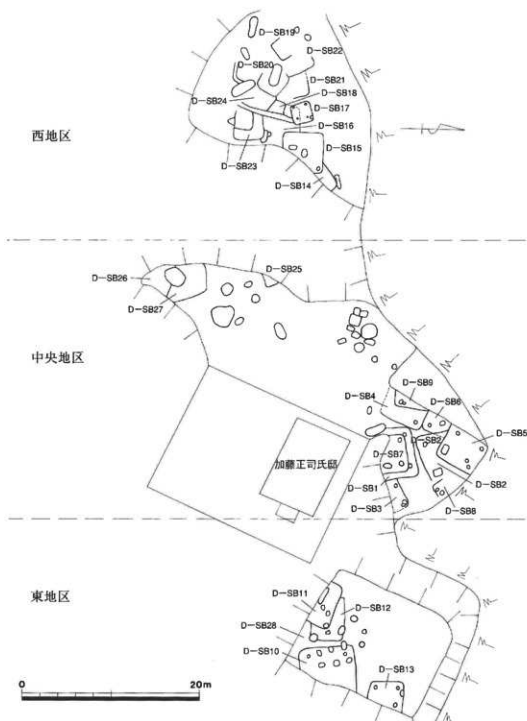
C—表採(108~115)



挿図第106 C区出土 遺物実測図5 (黒色有機土層・表採)

第6章 D区の調査

D区は全調査区の中央北側に所在し、第2次調査B区の西側、C区の北側、さらに浪ノ上1号墳の東側に囲まれた一帯にあり、浪ノ上台地の縁端部中央を占めている。



挿図第107 D区全体における遺構の分布

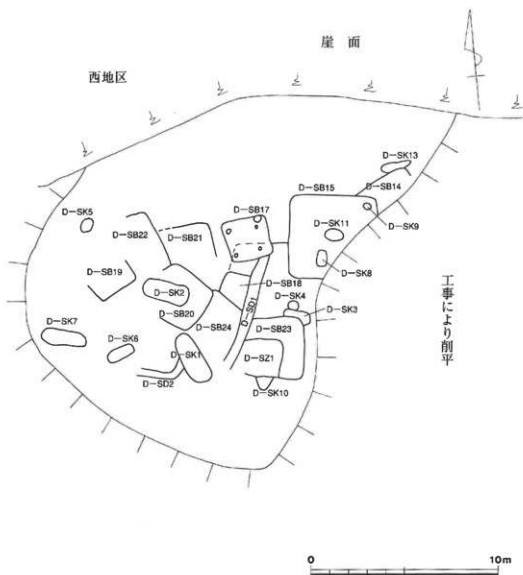
発掘調査は、第3次調査と第4次調査の2度にわたり行われた。

調査地区は、東西約85m、南北30m、面積2,550㎡が設定されたが、工事による削平や土置場などのため、実際に行われた調査面積は、約1,500㎡であり、全体の59%であった。

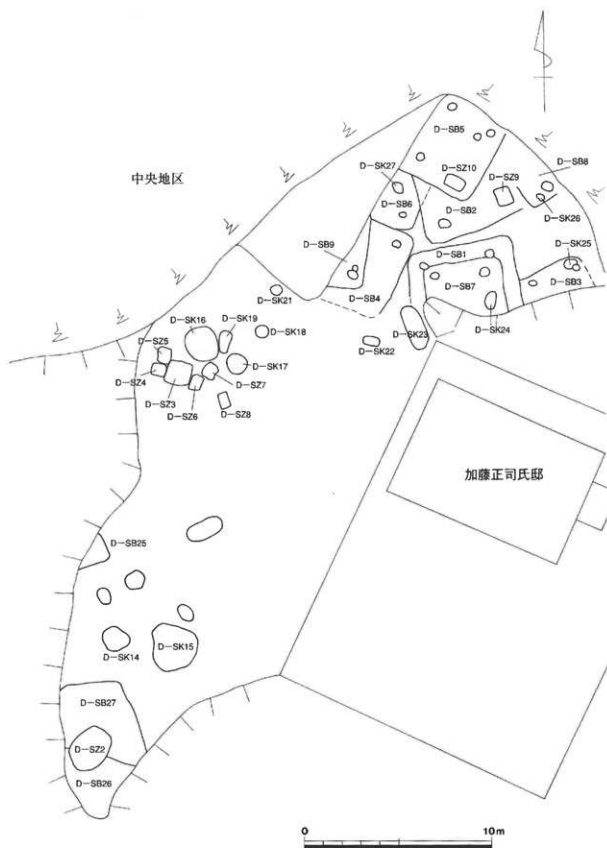
調査は、樹木や竹林の伐採、仮設道路の設営に伴う作業のため、手間どった。その上、台地の縁端部にあたため、斜面の裾では、黒色有機土層が厚さ1mほど堆積しており、人力による発掘作業は難行した。

区画整理事業の進捗に伴って、東西85mのD区を断ち切るように、幅5mから15mの土砂削平が、東と西の2箇所で行われた。その結果、D区は、東地区と中央地区と西地区の3ブロックに、扇状に分断されてしまった。

発掘調査の結果、東地区からは、竪穴住居址D-SB10からD-SB13までの4軒と掘立柱建物址



挿図第108 D区における遺構の分布1 (西地区)



挿図第109 D区における遺構の分布2（中央地区）

1棟、土壌D-SK28からD-SK31・D-SK33からD-SK35までの7基が検出された。

中央地区では、竪穴住居址D-SB1からD-SB9、D-SB25からD-SB27までの12軒、土壌D-SK14からD-SK23までと、D-SK25、D-SK26までの12基、土壌墓D-SZ2からD-SZ10までの9基が検出された。

西地区では、竪穴住居址がD-SB14からD-SB24までの11軒、土壌がD-SK1からD-SK7、D-SK9からD-SK11までの10基、溝がD-SD1とD-SD2の2条、土壌墓D-SZ1の1基が検出された。

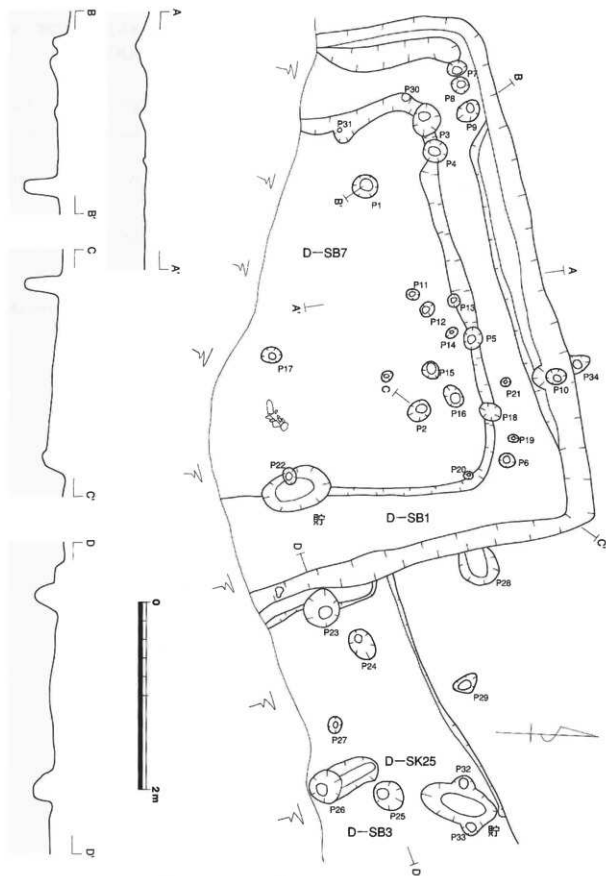
D区全体としては、竪穴住居址D-SBは27軒、掘立柱建物址D-SBが1棟、土壌D-SKが30基、溝D-SDが2条、土壌墓D-SZが1基検出されたことになる。

第1節 竪穴住居址・掘立柱建物址

D区内から検出された竪穴住居址D-SBが27軒、掘立柱建物址D-SBは1棟である。D区の調査で述べたように、D区は東地区、中央地区、西地区の3地区に分けられる。



挿図第110 D区における遺構の分布3（東地区）



挿図第111 竪穴住居址D-SB1・D-SB3・D-SB7実測図

東地区では、D-SB13は1軒独立しているが、D-SB11はD-SB12を切り、D-SB10はD-SB28に切られている。

中央地区では、D-SB1とD-SB7は重複している。D-SB3は、D-SB1に切られている。D-SB27はD-SB26に切られ、D-SB2、D-SB4、D-SB5、D-SB6、D-SB8、D-SB9の6軒の竪穴住居は、切り合い状態から、D-SB6が最も古く、次にD-SB2、次がD-SB5である。他方、D-SB6が古く、D-SB4、D-SB9の順に新しくなる。

西地区では、D-SB14からD-SB24まで11軒の竪穴住居が検出された。

この竪穴住居群を東西に分断するように溝D-SD1が南北につくられている。溝の東側と西側に分けて、竪穴住居の新古を述べる。

東側では、D-SB14とD-SB16が古く、D-SB16を切っているD-SB15とD-SB23が新しい。

西側では、古い順にあげるとD-SB16→D-SB18→D-SB24→D-SD1→D-SB7となる。D-SB24を切っているD-SB20はD-SB24よりも新しい。D-SB22はD-SB20に切られているからD-SB22の方が古い。このD-SB22をD-SB19は切っている。

D-SB22はD-SB21を切っていることから、D-SB21が古いことになる。このことから古い順に並べるとD-SB21→D-SB22→D-SB20とD-SB21→D-SB22→D-SB19の2つの流れになる。

1、竪穴住居D-SB1

(1) 遺構(挿図第109、挿図第111、図版第49の2、図版第50、図版第51、図版第62の1)

竪穴住居D-SB1はD区内の中央東寄りに位置する。南側半分は土置き場になっていたため調査できなかった。削平面から床面までの深さは6~20cmである。北壁と西壁にはさらに内側に壁溝が認められ二重になっている。床面は東西の長さ5.00m、南北の長さは不明である。平面形は方形か長方形であろう。主軸方位はN-11°-Wである。竪穴住居内には24個の柱穴が認められるが、本竪穴の柱穴は推定4個であるが、P3(38×28×15)、P6(18×15×10)の2個が想定される。また、本竪穴に関係する添柱としてP7(23×20×7)、P8(19×18×9)、P9(32×22×9)、P10(18×17×16)の4個が考えられる。貯蔵穴は東壁沿いにあり、平面形は楕円形で、断面形は浅い平底形であり、その規模は長径73cm、短径45cmである。炉址は検出されなかった。

(2) 遺物(挿図第130の1~9、図版第62の1)

2~7は、D-SB1の床面から検出した遺物であり、1・8・9については埋土中から検出した。

1は、深鉢の口縁部破片である。外面に断面V字状の条痕をもち口縁部は外反して丸味をおびた口端に至る。2~5は甕である。2・5は、短い口頸部をもつく字状口縁の甕である。3は、長い口頸部をもつく字状口縁の甕である。4は、S字甕で、口端は面取りされ平坦面をつくりだしている。6は、壺の口頸部である。丈が長く直線的に開く口縁部をもち、口端は細くつぼめ丸く仕上げている。7は、高坏の坏部で、やや反り気味に開く脚に3ヶ所の透かし孔が穿たれている。

8は、須恵器である。蓋坏の身の底部破片で、底面に回転ヘラケズリ痕が残る。

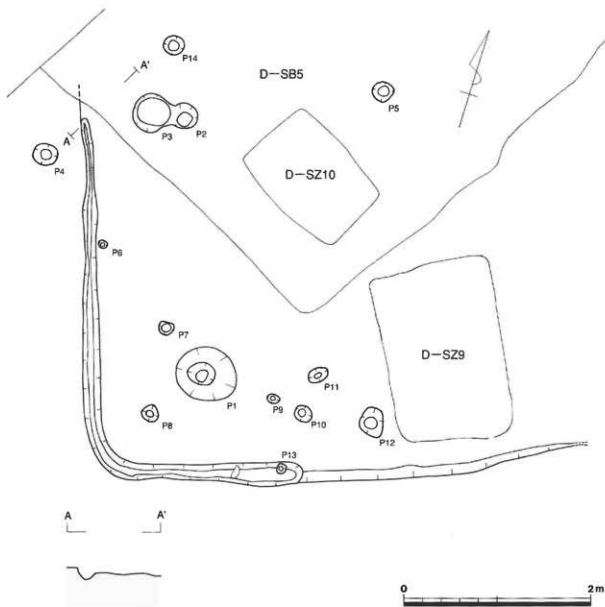
9は、チャート製のナイフ形石器である。基部および側縁に刃潰しの調整剥離痕が残る。

本D-SB1の埋土中から見出した9は、茂呂型のナイフ型石器であり後期旧石器時代の所産である。1は、弥生時代前期の水神平式土器である。6は、須恵器を伴う時期の土師器の可能性がある。8は須恵器の蓋坏の身であり、古墳時代後期のものであろう。D-SB1床面から検出した遺物は古墳時代前期の王江式土器の様相を示し、堅穴はこの時期に営まれたものと考えられる。

2、堅穴住居址D-SB2

(1) 遺構(挿図第109、挿図第112、図版第53の1、図版第56の1)

堅穴住居址D-SB2はD区内の中央部にあり、加藤氏宅の北側に位置する。堅穴住居址D-SB



挿図第112 堅穴住居址D-SB2 実測図

1に隣接している。北側の半分は竪穴住居址D-SB5に、北東壁は土壌墓D-SZ9及び竪穴住居址D-SB8に切られている。しかし、D-SB6を切っている。削平面から床面までの深さは8cmである。西壁の一部と南壁の一部には壁溝が認められる。壁溝は幅10~26cm、深さ10cmである。床面の規模は両壁が存在しないため不明である。平面形は方形または長方形と考えられる。主軸方位はN-23°-Wである。推定される柱穴は4個であるが、検出された柱穴は2段掘りになったP1で外径は長径71cm、短径50cmであり、内径は長径27cm、短径24cm、深さ47cmである。P2は長径28cm、短径25cm、深さ62cmを測る。P14は長径23cm、短径19cm、深さ44cmである。P2、P14は本竪穴住居址の柱穴であろう。貯蔵穴や炉址はともに検出されなかった。

(2) 遺物 (挿図第130の10・11)

10・11は、いずれもD-SB2の床面から検出した。10は、甕の口縁部破片である。くの字状に折れ立上る口縁部をもち口端近くで外反し細くつぼめている。口端は丸味をもたせ仕上げている。11は、蓋坏の身の体部から底部にかけてのものである。底部には回転ヘラケズリ痕が全面に残り、ヘラ記号が認められる。

本D-SB2から検出された床面の遺物は、古墳時代中期の青山式土器の特徴を示している。

3、竪穴住居址D-SB3

(1) 遺構 (挿図第109、挿図第111、図版第56の1)

竪穴住居址D-SB3はD区内の中央部に位置し、加藤氏宅に隣接している。竪穴住居址D-SB1によって南西側は切られている。また南側半分は土置き場として使用されていたため、北壁部分しか明確でない。削平面から床面までの深さは10~16cmである。壁溝は認められない。床面の規模及び平面形は不明である。主軸方位はN-28°-Wである。推定される柱穴は4個であるが、P23 (39×36×31)、P25 (32×32×28)の2個が検出された。柱穴間の長さは2.10mである。貯蔵穴は北壁寄りにあり、平面形はラグビーボール状で、断面形は鍋底形である。規模は長径84cm、短径42cm、深さ20cmである。炉址は検出されなかった。

(2) 遺物 (挿図第130の12、図版第62の2)

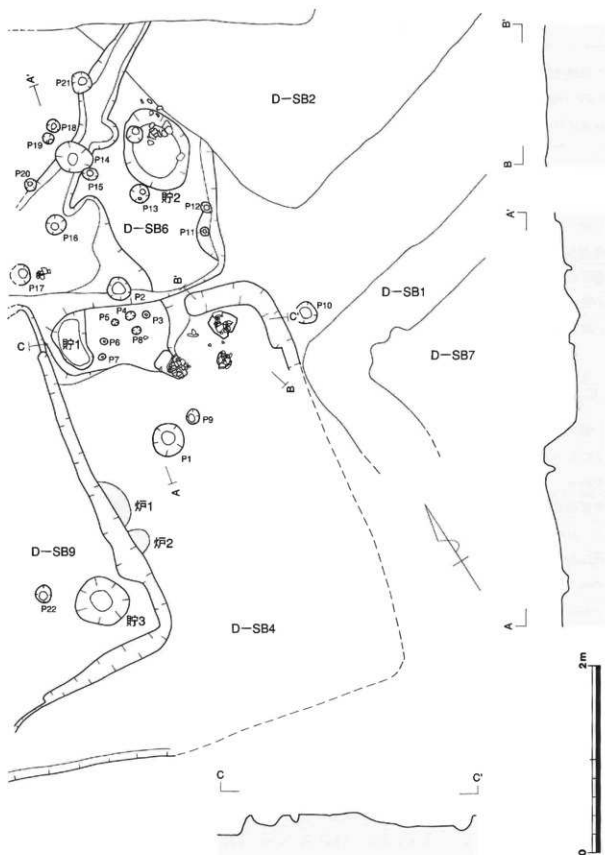
12は、D-SB3床面から検出した小形の埴である。口径の2/3の大きさの底部をもち、やや内彎気味に立上げ口端に至る器形である。底面には凹みをもっている。

本D-SB3は、D-SB1によって切られており、王江式土器またはそれより古い時期の竪穴と考えられる。

4、竪穴住居址D-SB4

(1) 遺構 (挿図第109、挿図第113、巻頭図版第7の1、図版第50、図版第52、図版第56の1)

竪穴住居址D-SB4はD区内の中央部北側に位置する。竪穴住居址D-SB1の西側に隣接している。西側は竪穴住居址D-SB9によって切られている。北壁の一部と南壁の一部に壁溝が認められる。平面形は方形または長方形であろう。主軸方位はN-15°-Eである。推定される柱穴は4個であるが、P1 (34×32×8)の1個が該当する。P3 (6×6×4)、P4 (10×8×10)、P5 (9×7



押図第113 竪穴住居址D-SB4・D-SB6・D-SB9実測図

×12)、P6 (8×6×6)、P7 (6×6×4)、P8 (7×5×4) は竈に関連したピットである。竈は北壁の一部を扶って構築されている。P25は竈の横に設けられた貯蔵穴で平面形は楕円形で、断面形は浅い平底形である。規模は長径60cm、短径35cm、深さ12cmである。炉址は床面中央部に2箇所認められた。

(2) 遺物 (挿図第130の13～18、挿図第131の19～24、図版第62の3～6、図版第63の1・2)

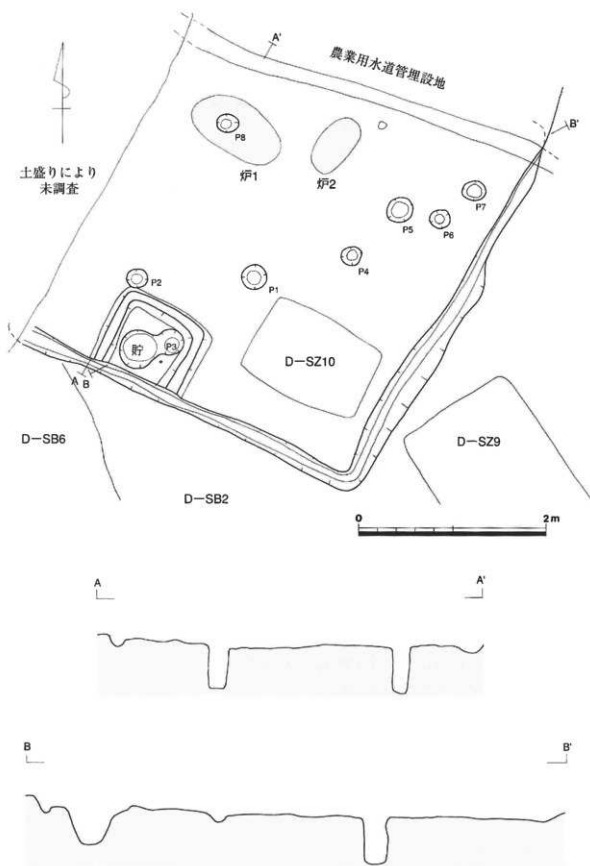
18・21・24は、D-SB4の床面から検出し、14～17・20・22は、埋土から検出したものである。13は、堅穴北東隅に存在した貯蔵穴から検出し、19・23は、堅穴北側にもうけられた竈址の前面から検出されたものである。13～19は、甕である。13は、ゆるやかに外反する丈の長い口頸部をもつ甕で、口端を厚くして丸味をもたせている。14は、くの字状口縁をもつ甕の口縁部から上胴部の破片である。15・17は、S字甕の口縁部破片で、いずれもS字状口縁部の口端内面を斜めに面取りしている。17は、肩部に斜位のハケメ調整を行った後に、平行横線を施している。16は、受口状に開く甕の口縁部である。口縁の外面にクシ状器具による刺突文列を巡らせている。18は、胴の長い甕の上胴部から下胴部である。19は、丸底の甕で、ゆるやかに外反する口頸部をもち口端を丸く仕上げている。口頸部はヨコナデ調整を行い上胴部から底部まで荒いハケメ痕を残し底部側面に焼成前の段階で付いた底面を思わせる平坦部がある。20・21・22・24は、壺である。20は、口端を欠く口縁部である。頸部に断面三角形の稜が付き、ヘラ状器具による刺突文列を巡らせている。口縁部は大きく外反する。24も口縁部である。上下に拡張した口端をもち、外面にはクシ状器具による横線帯を巡らせている。21は、丸底の壺である。球形に近い体部をもち、くの字状に外反する丈の高い口縁部をもつ。口端は細くつばめ丸く仕上げている。22は、平底の底部である。23は、甕の把手である。指ナデ痕が明確に残る。

B-SB4の埋土から検出された14～17・20は、瓜郷上層第3様式すなわち王江式土器の前半期と考えられる。堅穴の時期を示すものとして、竈址、貯蔵穴、床面から検出した遺物13・18・19・21・23・25は、古墳時代中期から後期前半のものと考えられる。よって堅穴はこの時期であろう。またD-SB9は、本D-SB4を切っている。

5、堅穴住居址D-SB5

(1) 遺構 (挿図第109、挿図第114、図版第50の1、図版第56の1)

堅穴住居址D-SB5はD区内の中央部の最北端に位置し、堅穴住居址D-SB2とD-SB6を切って構築されている。北東部は崖面にあたり、北西部は土置き場のため調査できなかった。本堅穴住居址D-SB5の南東部は土壌墓D-SZ10に攪乱されている。南東壁と南西壁に壁溝が巡らされている。平面形は方形または長方形である。柱穴はP2 (23×19×44)、P5 (26×25×50)、P8 (24×20×-) の3個が検出された。柱穴間の長さはP2～P8が1.92m、P5～P8が2.08mである。南東寄り柱穴は、土壌墓D-SZ10により欠損している。南西壁沿いには平面形はほぼ円形で断面形は深い鍋底形をした貯蔵穴が認められる。その規模は長径44cm、短径42cm、深さ41cmである。貯蔵穴をとり囲むように赤土で固めたマウンドが幅20cm、高さ10cmの規模でつくられていた。炉址は中央部に近いところで2箇所検出された。



挿図第114 竪穴住居址D-SB5実測図

(2) 遺物 (挿図第131の25~31、図版第63の3)

27・29・31は、D-SB5、床面から検出されたものである。28は、貯蔵穴から検出されたものである。25・26・30は、D-SB5の埋土中から見出したものである。25・26は甕である。25は、S字甕であり口縁部が外方に大きく開き、口端を丸く仕上げている。肩部には斜位のハケメ痕が認められる。26は、台付甕の脚部でやや膨みをもって開く端台に、面取りを施し四角張ってつくられている。27は、小形壺の胴部破片である。28は、体部に丸味をもたせ、口端内側を面取りした鉢である。29は、須恵器の蓋杯の身である。丈の高い受け部をもち、口端は丸みをもたせ仕上げられている。底部はヘラ削りで調整されている。

31は、鉄製品であり、断面長方形をなすものである。

30は、天然ガラス、いわゆる黒曜石製の刃器である。両側面に使用痕が認められる。

本D-SB5の埋土中から見出した、30は、ナイフ形石器と考えられる。35・36は、王江式土器の段階におかれるものである。床面から出土した29は、須恵器第3形式にあたり、古墳時代後期（6世紀）と考えられる時期に本D-SB5は営なまれたものであろう。

6、竪穴住居址D-SB6

(1) 遺構 (挿図第109、挿図第113、図版第50の2、図版第56の1)

竪穴住居址D-SB6は竪穴住居址D-SB4の北側に接して位置する。竪穴住居址D-SB2とD-SB9に切られ、西側は土置き場のため調査できなかった。北東から南西に流れる溝状遺構が認められる。平面形は方形または長方形であろう。貯蔵穴は南東壁で検出された。平面形は倒卵形で断面は浅い平底形で、規模は長径90cm、短径57cmである。炉址は検出されなかった。

(2) 遺物 (挿図第131の32~37、図版第63の4)

32~37は、全てD-SB6床面から検出した遺物である。33は、S字甕の口縁部破片である。32・34は、受口状に開く口縁部をもち、外面にはクシ状器具による刺突文列を施している。33は、口端部を外側につまみ出している。34は口端を欠くものである。35は、台付甕である。やや内彎して開く脚台部をもち、脚台端を丸く仕上げている。36は、大形の広口壺である。器壁は厚く直線的に大きく開く口縁部をもつ。口端部は、直行した面をつくり、この面にクシ状器具による羽状文を施している。口端は平坦面をなす。37は、壺の底部で平底である。

本竪穴から出土した遺物から、竪穴の時期は王江式土器の段階と考えられるものである。

7、竪穴住居址D-SB7

(1) 遺構 (挿図第109、挿図第111、図版第49の2、図版第50、図版第51、図版第56の1)

竪穴住居址D-SB7はD区内の中央東寄りに位置する。竪穴住居址D-SB1内にあつて、床面の高さはほぼ同じである。南側は土置き場のため調査できなかった。壁溝は現存する壁に認められ、その規模は幅10~20cm、深さ8cmである。床面は東西の長さ3.80m、南北の長さは不明である。平面形は方形または長方形であろう。主軸方位はN-11°-Wである。推定される柱穴は4個であるが、検出された柱穴はP1(28×23×36)、P2(23×20×40)の2個で、南側の柱穴は検出されなかった。

貯蔵穴はならびに、炉址は検出されなかった。

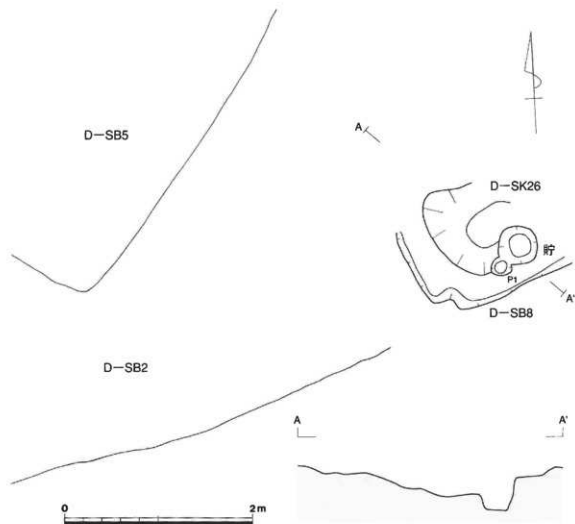
(2) 遺物

本D-SB7から図示出来る遺物は検出されなかったが、古式土師器または土師器の細片が認められた。また、D-SB7は、D-SB1の床面検出時に見出したもので、D-SB1と同時期またはそれより古い時期の所産であろう。D-SB1は、本D-SB7の建て増しとも考えられる。

8、竪穴住居址D-SB8

(1) 遺構 (挿図第109、挿図第115、図版第56の1)

竪穴住居址D-SB8はD区内の中央部北寄りに位置し、竪穴住居址D-SB2の東側に所在する。東側は崖面で欠損し、北側の床面は工事で削平されていたため、南西角を検出することができたのみである。削平面から床面までの深さは10cmである。壁溝は認められない。主軸方位はN-44°-Wで



挿図第115 竪穴住居址D-SB8実測図

ある。貯蔵穴は南西部にあり、平面形はほぼ円形で、断面形は鍋底形である。その規模は径37cm、深さ44cmである。

(2) 遺物

本堅穴からは、図示出来る遺物は検出されなかった。少量の土師器破片が認められた。D-SB8は、D-SB2の東壁を切る状態で検出されており、古墳時代中期または、これ以前に営まれた堅穴と考えられる。

9、堅穴住居址D-SB9

(1) 遺構 (挿図第109、挿図第113、図版第56の1)

堅穴住居址D-SB9はD区内の中央部に位置する。北西側は土置き場になっていたため調査できなかった。削平面から床面までの深さは24cmである。壁溝は東壁と南壁の一部に認められる。床面は東西の長さは不明、南北の長さは3.76mである。主軸方位はN-7°-Eである。柱穴は推定4個であるが、P24 (20×16×15) の1個を確認できた。貯蔵穴は南東隅にあり、平面形は隅円長方形で、断面形は浅い平底形である。規模は長径56cm、短径52cm、深さ15cmである。炉址は検出されなかった。

(2) 遺物

本D-SB9からは図示できる遺物は検出されなかったが、少量の土師器破片が認められた。D-SB9は、D-SB4の北壁の竈址を切ってつくられていることから、古墳時代後期またはそれ以後に営まれた堅穴と考えられる。

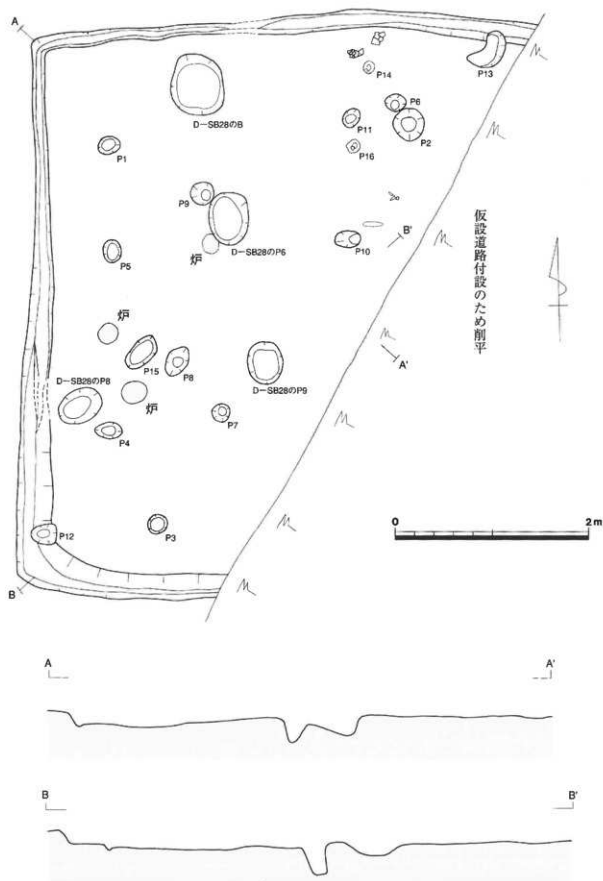
10、堅穴住居址D-SB10

(1) 遺構 (挿図第110、挿図第116、図版第55)

堅穴住居址D-SB10はD区内の東側に位置する。北東側は工事により削平され欠損している。削平面から床面までの深さは14cmである。壁溝は現存する壁にはすべて認められる。壁溝の幅は10~38cm、深さは4~8cmである。床面は東西の長さは不明、南北の長さ5.66mである。平面形は方形または長方形である。主軸方位は真北である。柱穴は推定4個であるが、P7 (20×20×32)、P9 (15×15×12) の2個が検出された。柱穴間の長さは2.32mである。貯蔵穴は不明である。炉址は、西壁寄りに2箇所、中央北西寄りに1箇所認められた。

(2) 遺物 (挿図第131の38~40、挿図第132の41~48、図版第63の5・6、図版第64の1・2)

38~45・47・48は、D-SB10の床面から検出したものであり、46はD-SB10の西側の壁溝内から検出したものである。38は、台付甕で口縁部と脚端部を欠く。胴部は球形に近く脚は直線状に開いている。40は、小形壺の胴部で球形を呈している。39は、平底の底部片である。41・42・43・45は、高坏の脚部である。やや開いた柱状の脚の3/4下端で大きく開く41・42と、脚に影みをもち1/4下端で大きく開く43・45がある。43の影み部にはクシ状器具による薄い横線帯が巡る。44は、脚端を欠くがほぼ全形を知るものである。脚部の形状は前者の柱状のものに近い。坏部は皿状の下部から口縁の立上りで不明確な稜をつくり、丸味をおびた口端まで直線的に大きく開く。46は、器台で坏部と脚部の上端が残る。柱状の脚部が付くものと考えられる。坏部は皿状の下部から、口縁部にうつる部分に断



挿図第116 竪穴住居址D-SB10実測図

面三角の突帯が付き、この部分から外反して丸味のある口端に至る。口縁部には3ヶ所の透し孔が穿たれている。47は、埴である。平底で丸味をおびた胴部をもち、丸く仕上げた口端に至る。48は、甗である。丸底に近い底部片であり、2ヶ所に円孔が残存している。

本D-SB10の時期は、古墳時代中期の青山式土器の時期に比定される。

11、竪穴住居址D-SB11

(1) 遺構(挿図第110、挿図第117、図版第55の1)

竪穴住居址D-SB11はD区内の東端に位置する。竪穴住居址D-SB12の南西部を切って作られている。さらに、工事により南側大半が削平されている。削平面から床面までの深さは16cmである。壁溝は認められない。床面は東西の長さ4.80m、南北の長さは不明である。平面形は方形または長方形であろう。主軸方位はN-25°-Eである。柱穴はP1(32×30×20)、P2(34×33×35)と考えられ、その間の長さは2.54mである。貯蔵穴は北東角にあり、平面形は楕円形で、断面形は浅い平底形である。規模は長径51cm、短径38cm、深さ16cmである。炉址は検出されなかった。なお、住居址内には土壙D-SK28、D-SK29、D-SK30の3基があり攪乱されている。

(2) 遺物(挿図第132の49)

49は、D-SB11内の土壙から検出した高坏の坏部である。皿状の下部に稜をもち口縁部は直線状にひらく。口端はヨコナデにより内彎している。

この遺物は直接D-SB11の時期を示すものではないが、青山式土器であろう。また本竪穴は、D-SB12を切っていることからD-SB12より新しい竪穴である。

12、竪穴住居址D-SB12

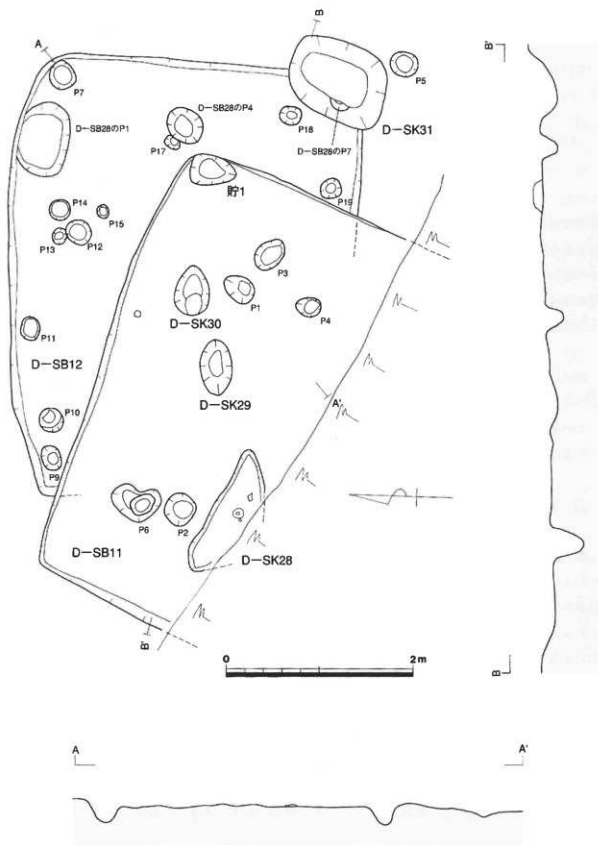
(1) 遺構(挿図第110、挿図第117、図版第54の1、図版第55の1)

竪穴住居址D-SB12は区内の東端に位置する。南西側は竪穴住居址D-SB11によって大半が切られている。さらに土壙D-SK31に攪乱されていたため、構築当時のままになっている部分はごくわずかである。削平面から床面までの深さは10cmである。壁溝は認められない。平面形は隅円長方形である。床面は東西の長さ4.60m、南北の長さ3.60mである。主軸方位はN-3°-Eである。柱穴は推定4個であるが、P7(30×30×20)、P9(25×25×21)の2個検出された。貯蔵穴および、炉址は検出されなかった。

(2) 遺物(挿図第132の50・51、図版第64の3)

50は、D-SB12内貯蔵穴と考えられる土壙から検出した甗である。やや外反するくの字状口縁をもち、胴部は球形に近い器形である。51は、床面から検出した高坏の坏部で、皿状の下部から稜をなし大きく開き口端は丸く仕上げられている。

本D-SB12から検出した遺物は、青山式土器の時期である。北側にあるD-SB11との切り合い状況は、D-SB12がD-SB11に切られていた。



挿図第117 竪穴住居址D-SB11・D-SB12実測図

13、竪穴住居址D-SB13

(1) 遺構 (挿図第110、挿図第118)

竪穴住居址D-SB13はD区内の北東端に位置する。東側は工事で削平されている。削平面から床面までの深さは6~10cmである。壁溝は認められない。床面は東西の長さ3.50m、南北の長さ3.90m、面積約14㎡である。平面形は南西隅は隅円であるが、北西隅と北東隅は角ばっていることから長方形に近い。主軸方位はN-5°-Eである。柱穴は推定4個であるが、P1 (15×12×12)、P2 (20×20×20)、P3 (23×20×13) の3個が検出された。柱穴間の長さはP1~P2が2.00m、P3~P1が2.06mである。炉址は中央部東側に1箇所認められた。貯蔵穴は北壁面に接して設けられており、平面形は楕円形で、断面形は浅い平底形である。長径77cm、短径44cm、深さ14cmである。

(2) 遺物 (挿図第132の52~56)

52~55はD-SB13の床面から検出し、56は、埋土中から見出したものである。52・53は、甕の脚台部である。52は、脚台の開きが直線的で、53は、やや内彎している。脚台端はいずれも面取りされ角張って平坦面をつくる。54・55は、壺の口縁部破片である。54は、口縁部を上下に拡張するもので、クシ状器具による薄い横線文が施されている。55は、大きく開き外反する口縁部の口端の上部を拡張し、受口状を残した口端部をもつものである。56は、柱状を成す高坏の脚部破片である。

本D-SB13の床面から検出した遺物は、王江式土器の時期と考えられるものである。

14、竪穴住居址D-SB14

(1) 遺構 (挿図第108、挿図第119、図版第54の2)

竪穴住居址D-SB14はD区内の西側北東に位置する。南東側の大半が工事で欠損し、竪穴住居址D-SB15によって南西部が切られている。そのため北西壁の一部が残存するのみである。削平面から床面までの深さは14cmである。壁溝は認められない。主軸方位はN-28°-Wである。柱穴、貯蔵穴、炉址はいずれも検出されなかった。

(2) 遺物 (挿図第133の57~59、図版第64の4)

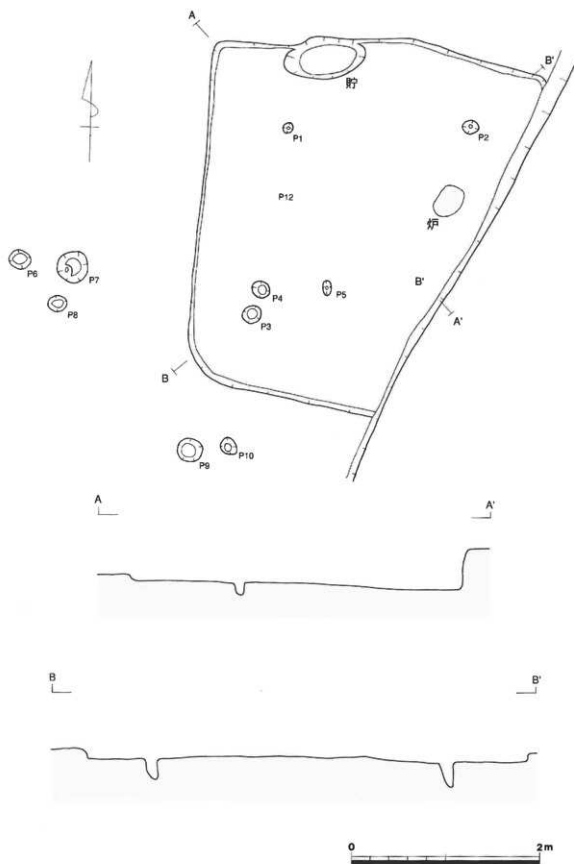
57~59は、全てD-SB14の床面から検出した遺物である。57は、甕の口縁部から下胴部であり、くの字状に大きく外反する口縁部をもち、胴部は球形を呈している。58は、台付甕の脚台部で器壁が厚く、直線的に開く脚をもつ。脚端は丸く仕上げられている。59は、壺の上脚部破片であり、クシ状器具による波線文を残している。

本D-SB14の営まれた時期は王江式土器の時期にあたる。

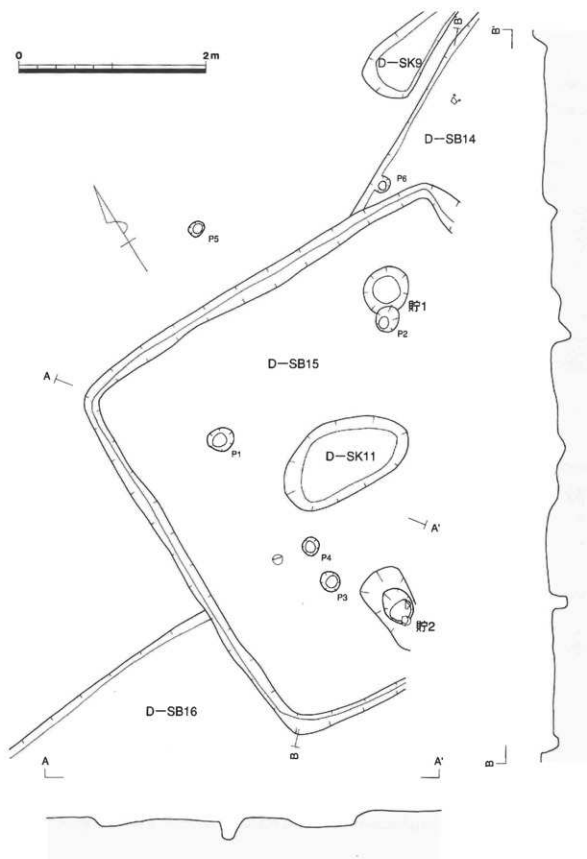
15、竪穴住居址D-SB15

(1) 遺構 (挿図第108、挿図第119、図版第54の2)

竪穴住居址D-SB15はD区内の西側に位置する。南東部は工事で削平されている。住居址内には土壇D-SK11がある。削平面から床面までの深さは14cmである。現存する壁にはすべて壁溝が認められ、壁溝の幅は14~28cm、深さ10~14cmである。床面は東西の長さ4.16m、南北の長さ4.10m、面積約17㎡である。平面形は正方形である。柱穴は推定4個であるが、P1 (27×26×22)、P2 (27×



挿図第118 竪穴住居址D-SB13実測図



挿図第119 竪穴住居址D-SB14・D-SB15・D-SB16実測図

23×24)、P3 (25×24×18) の3個が検出された。その間の長さはP1～P2が2.20m、P3～P1が2.00mである。貯蔵穴は北東寄りと南壁沿いの2箇所にある。北東寄りの貯蔵穴1の平面形はほぼ円形で、断面形は浅い平底形である。その規模は長径46cm、短径40cm、深さ14cmである。南壁沿いの貯蔵穴2の平面形は長方形で、断面形は鍋底形である。その規模は長径90cm、短径50cm、深さ30cmである。炉址は検出されなかった。

(2) 遺物 (挿図第133の60～71、図版第64の5・6、図版第65の1～3)

60～68、70・71は、D-SB15の床面から検出した遺物であり、69は、埋土中から見出したものである。60・61は、口縁部がくの字状に折れ、やや外反して丸味のある口端に至る甕の破片である。62～66は各種壺である。62は、大形の有段口縁をもつ壺の口縁部である。器壁が厚く、外反する口縁部には3条一組の断面三角状の浮文が付けられている。また口端を上げ平坦面をつくり出している。この部分の下方には、焼成前にあけられた円形の小孔が認められた。63は、壺口縁部、66は、壺口縁部から上胴部にかけてのものである。口縁部は強く開き、高い口頸部をもつ。64・65は、底部が平底の小形の壺である。64は、口縁部を欠いているが、65は、やや内彎して大きく開く口縁部が残る。口端は面取りをして平坦面をつくらせている。いずれも口端近くで外反して、口端部はナデ調整による沈線が認められる。

67・68は、高坏の脚部である。67は、脚の下方を欠く。いずれも管状の脚部をもち3/4の部分から開脚し、丸味をおびた脚端に至る形状である。69は、坏部から脚部にかけてのもので、皿状の坏下部に八の字状に開く脚が付くものである。70は、平底の塊である。丸味をもたせて立上り、やや内彎した口縁部をもつ。口端は細めて、丸く仕上げている。底面には凹みがある。

71は、砂岩製の凹石である。1/3ほど欠けており、表裏面に敲打による凹みがある。

本D-SB15は東側のD-SB14と西側のD-SB16を切っており、両堅穴よりも新しい時期に営まれた堅穴住居址である。D-SB15の底面から検出した遺物のうち、69を除き青山式土器であった。よって、本堅穴はこの時期に営まれたものと考えられる。また、71の石器については台石としてこの時期に使用されたものと考えられる。

16、堅穴住居址D-SB16

(1) 遺構 (挿図第108、挿図第119)

堅穴住居址D-SB16はD区内の西側に位置する。堅穴住居址D-SB15、D-SB17、D-SB18と土壇D-SK4、D-SK3に切られ、さらに溝D-SD1にも切られている。そのため北壁の一部が残存するのみである。削平面から床面までの深さは4cmである。壁溝は認められない。主軸方位はN-4°-Wである。柱穴、貯蔵穴、炉址は検出されなかった。

(2) 遺物 (挿図第134の72～74)

72～74は、全てD-SB16の床面から検出された遺物である。72は、S字甕の口縁部であり、やや外方に開き、口端は丸く仕上げている。73・74は、壺である。73は、口端を欠いている。口縁部から上胴部あたりの破片で、有段口縁をなす「柳ヶ坪型壺」である。口縁内面にはクシ状器具による羽状文を施し、外面には同器具による斜位の刺突文を施している。74は、上胴部破片である。クシ状器具

による薄い横線文帯の下方にヘラ状器具による刺突文列を巡らしている。この上方に円形浮文を付けている。

本D-SB16の東側は、D-SB15によって切られている。本D-SB16は王江式土器の時期であろう。

17、堅穴住居址D-SB17

(1) 遺構 (挿図第108、挿図第120)

堅穴住居址D-SB17はD区内の西側北端に位置する。堅穴住居址D-SB16を切り、溝D-S-D1を切っている。削平面から床面までの深さは8~20cmである。壁溝は認められない。床面は東西の長さ2.28m、南北の長さ2.24m、床面積約5㎡である。平面形は隅門方形である。主軸方位はN-15°-Wである。柱穴はP1(10×10×12)、P2(14×14×12)、P3(10×10×13)、P4(17×13×12)の4個で、その間の長さはP1~P2が1.26m、P2~P3が1.18m、P3~P4が1.46m、P4~P1が1.10mである。貯蔵穴は北東隅にあり、平面形は楕円形で、断面形は平底形である。その規模は長径56cm、短径35cm、深さ16cmである。炉址は検出されなかった。

(2) 遺物

D-SB17からは少量の土器器細片が出土しているが、時期を明らかにすることはできなかった。なお、堅穴の切り合い状況は、D-SB17がD-SB16を切っていた。青山式土器の時期かこれより以後の時期に営まれたものと思われる。

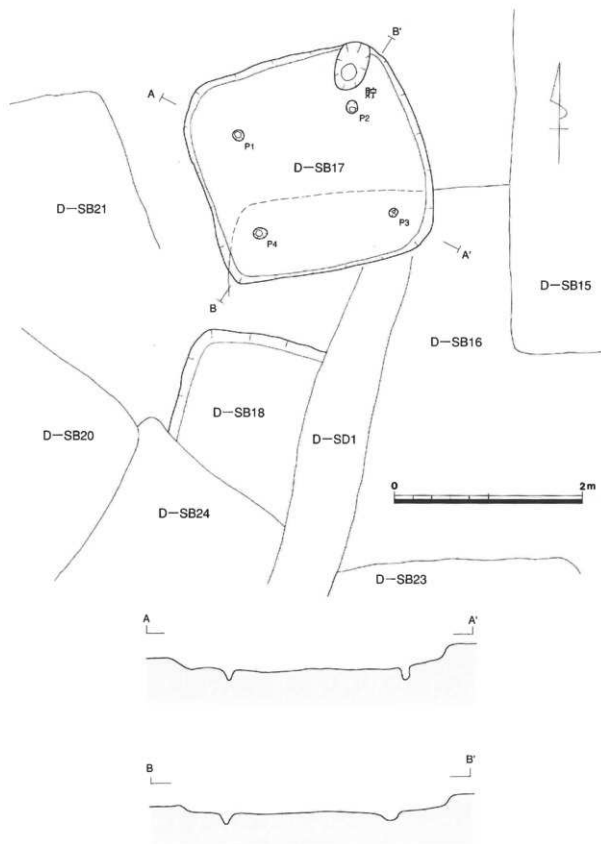
18、堅穴住居址D-SB18

(1) 遺構 (挿図第108、挿図第120)

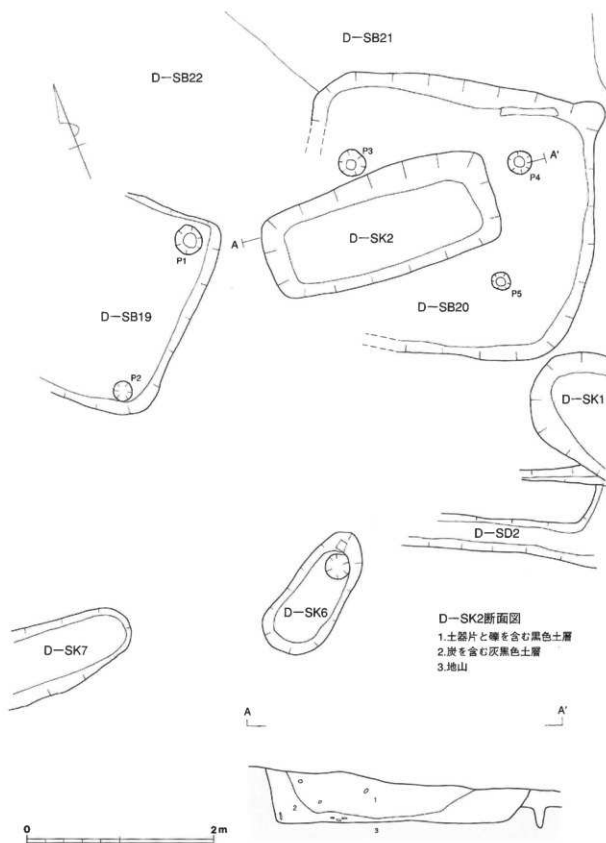
堅穴住居址D-SB18はD区内の西側に位置する。堅穴住居址D-SB24と溝D-S-D1に切られている。そのため北壁の一部、西壁の一部が残存するのみである。平面形は方形または長方形であろう。主軸方位はN-13°-Eである。柱穴、貯蔵穴、炉址は検出されなかった。

(2) 遺物 (挿図第134の75~86、図版第65の4~6)

76~86は、全てD-SB18の床面から検出した遺物である。75は、埋土中から見出したものである。75は、甕の口縁部である。直行して立上る口縁部破片で、口端近くで外反している。76は、S字甕の口縁部である。口端は折り外反している。77~81は、壺である。77は、厚目の器壁をもち、口縁部の端を折り曲げて内面に平坦面をつくり出すもので、帯状の口縁外側にはクシ状器具による羽状文を施している。78は、上胴部破片でありクシ状器具により上方から、横線文、波線文を施している。その下方に巻目による刺突文列を加えたものである。また下方の無文部には赤彩を施している。79は、やはり上胴部破片が残存する外面に赤彩が認められる。80・81は、平底の底部である。底部には木の葉の圧痕が残る。82~84は、高坏である。82は脚端を欠く脚部であり、ハの字状に開脚する器形である。脚には3ヶ所の透し孔が認められる。83・84は同一個体とも考えられる高坏である。84は坏部で、皿状の坏底部から、やや丸気味をもたせ立ち上り、直線状に開口する器形である。口端は、面取りを行ない内側に平坦面をつくり出しているが、稜は明確ではない。83は、脚部である。脚の下半部から



挿図第120 竪穴住居址D-SB17・D-SB18実測図



挿図第121 竪穴住居址D-SB19・D-SB20、土坑D-SK2・D-SK6実測図

膨みをもち内彎して丸味をおびた脚端に至る。クシ状器具による薄い横線文帯が認められ、文様帯下方に4ヶ所の透し孔が認められている。85は、器台の坏部破片である。皿状の坏底部外面に四角状の突帯を付け、大きく開き口縁部に至る形状である。1ヶ所に透し孔が残存している。86は、埴である。底部は丸味をもち、内彎して口端に至る器形である。

75・76は、溝内の遺物である可能性がある。その他の遺物はD-SB18の時期を知りえるものであろう。壺74と高坏83・84は、弥生時代後期後葉の欠山式土器（註1）の特徴をもつものである。よって本堅穴はこの時期に営まれたものとしてよいであろう。

19、堅穴住居址D-SB19

（1）遺構（挿図第108、挿図第121）

堅穴住居址D-SB19はD区内の最西端に位置する。北西側は工事で削平されている。壁溝は認められない。床面は東西の長さは不明、南北の長さは2.16mである。平面形は方形または長方形である。主軸方位はN-40°-Eである。柱穴は推定4個であるが、P1（30×30×-）、P2（20×18×-）の2個が検出された。その間の長さは1.80mである。北西側の2個の柱穴は削平されていた。貯蔵穴と炉址は検出されなかった。

（2）遺物（挿図第134の87・89）

87・89はD-SB19床面から検出した遺物である。87・89はいずれも小形高坏の脚部である。八の字状に大きく開く脚をもち、開脚部から丸味をおび脚端に至っている。また透かし孔は認められない。本堅穴は単独に存在した。堅穴は、王江式土器の時期と考えられる。

20、堅穴住居址D-SB20

（1）遺構（挿図第108、挿図第121）

堅穴住居址D-SB20はD区内の西側に位置し、堅穴住居址D-SB19の東側に所在する。南西角が欠損している。住居址内には土壇D-SK2がある。壁溝は認められない。床面は東西の長さ2.80m、南北の長さ2.58m、床面積約7㎡である。平面形は隅円長方形である。主軸方位はN-33°-Eである。柱穴は推定4個であるが、P3（34×30×20）、P4（28×26×22）、P5（24×24×20）の3個が検出された。その間の長さはP3-P4が1.80m、P4-P5が1.36mである。南西の柱穴は土壇D-SK2より欠損している。貯蔵穴と炉址は検出されなかった。

（2）遺物（挿図第134の88）

88はD-SB20床面から検出した、壺の口縁部から下胴部の破片である。ゆるやかに立上る口縁部の口端は丸味を持つ。胴部は球形を呈している。

本D-SB20は、D-SK2によって切られている。したがってD-SK2と同時期、もしくはそれより古い時期に営まれた堅穴住居址と考えられる。

21、堅穴住居址D-SB21

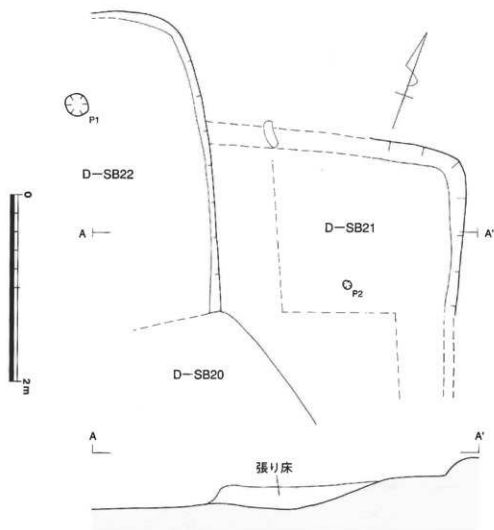
（1）遺構（挿図第108、挿図第122）

竪穴住居址D-SB21はD区内の西側に位置する。竪穴住居址D-SB22とD-SB20によって切られている。削平面から床面までの深さは20cmである。床面は一部張り床になっていた。張り床の厚さは20cmである。壁溝は認められない。床面の規模、平面形はともに不明である。柱穴、貯蔵穴、炉址はいずれも検出されなかった。

(2) 遺物 (挿図第135の90・91)

90・21は、いずれもD-SB21の床面から検出したものである。90は、S字堿の口縁部破片である。直線的に開く口縁に、厚く丸味をおびた口端をつくりだしている。21は、高坏と考えられるものである。脚下半部を欠くもので、碗状に開く坏部とハの字状に開く脚部をもつ。脚部には3ヶ所の透し孔が設けられている。

本D-SB21は王江式土器の時期と考えられる。



挿図第122 竪穴住居址D-SB21・D-SB22実測図

22、堅穴住居址D-SB22

(1) 遺構(挿図第108、挿図第122)

堅穴住居址D-SB22はD区内の西側の最北端に位置する。堅穴住居址D-SB19とD-SB20に切れ、D-SB21を切っている。削平面から床面までの深さは20~26cmである。壁溝は認められない。床面の規模は西壁と南壁が欠損しているため不明である。主軸方位はN-27°-Wである。柱穴は推定4個であるが、P1(26×22×-)の1個のみ検出された。貯蔵穴と炉址は検出されなかった。

(2) 遺物(挿図第135の92~97、図版第66の1)

92~97は、全てD-SB22の床面から検出した遺物である。92は、甕の口縁部から上胴部にかけてのものである。くの字状に外反する口縁部をもつ。93~97は、壺である。93は、上胴部である。上部からクシ状器具による横線文帯、波線文帯、横線文帯を順に施し、その下に棒状器具による刺突文列を加えている。94も上胴部破片である。クシ状器具による横線文帯の下に同器具による刺突文列を施している。97は、頸部から底部にかけて残存する。重心を下方におく胴の張った形状である。口縁部はくの字状に折れ立上るものと思われる。底部の底面に凹みをもつ。95・96は、底部であり、いずれも平底である。

本D-SB22は、D-SB21を切っており、D-SB20によって切られていた。壺にクシ描き文様と刺突文を多用した93・94、下胴部に重心をおいた下腹れの97などから、この地方の瓜郷上層第3様式、すなわち王江式土器の前半の時期に営まれた堅穴であろう。

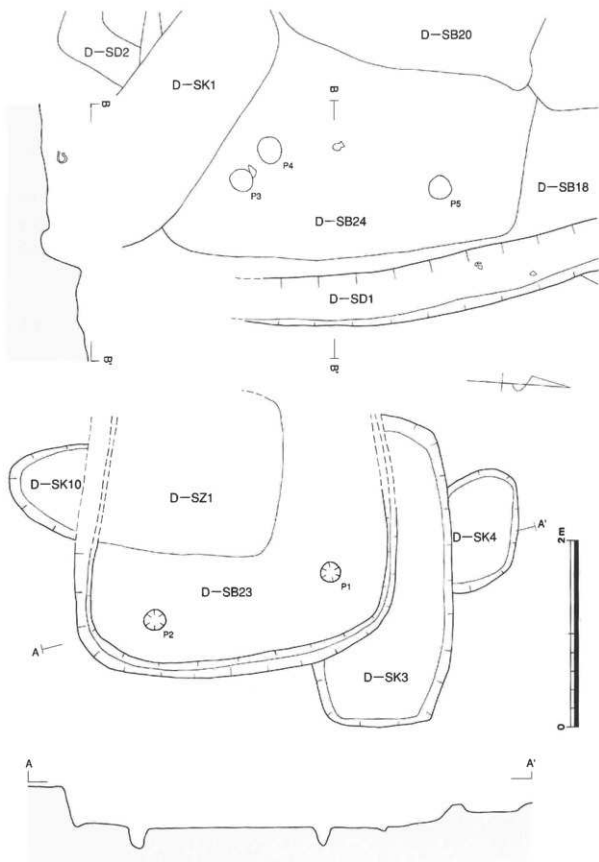
23、堅穴住居址D-SB23

(1) 遺構(挿図第108、挿図第123)

堅穴住居址D-SB23はD区内の西側に位置する。土壌D-SK3とD-SK10を切り、土壌墓D-SZ1に切られている。削平面から床面までの深さは42~46cmである。壁面の存在している所は壁溝が巡っている。壁溝は幅12~20cm、深さ4~8cmである。床面は東西の長さ3.10m、南北の長さは不明である。主軸方位はN-6°-Eである。柱穴は推定4個であるが、P1(24×24×-)とP2(28×26×-)が関係していると思われる。貯蔵穴と炉址は検出されなかった。

(2) 遺物(挿図第135の98~105、挿図第136の106~123、挿図第137の124~142、挿図第138の143~167、挿図第139の168~173、図版第66の3~6、図版第67の1~4、図版第68の1~5)

D-SB23の104・158・163~167は堅穴の埋土中から検出されたものである。後の遺物は床面から検出された。98~100・102~123・173は、甕の各部位である。98~100・102~109は、くの字状口縁をもつ甕の口縁部から上胴部にかけての破片である。110は、台付甕の全形を知ることができるものである。98・100・103~105は、口縁が直線的に立上るものである。98の縁部外側には薄い刺突文列が認められる。胴部の形状を知るものとして105にみられる様な球形を呈したものがある。102は、口縁が外反して、ヨコナデ調整によって、S字甕の受け部に似せた形状をなすものである。99・108・109は、口縁が大きく外反するものである。110は、くの字状口縁の口端部で受口状に内彎して、内面に稜をもつ。胴形はほぼ球形を呈している。脚台部はハの字状に開き、脚台端は四角張っている。小ぶりの脚部である。107は、口端を内反させ、甕の口縁部を思わせる形状を呈したものである。111~

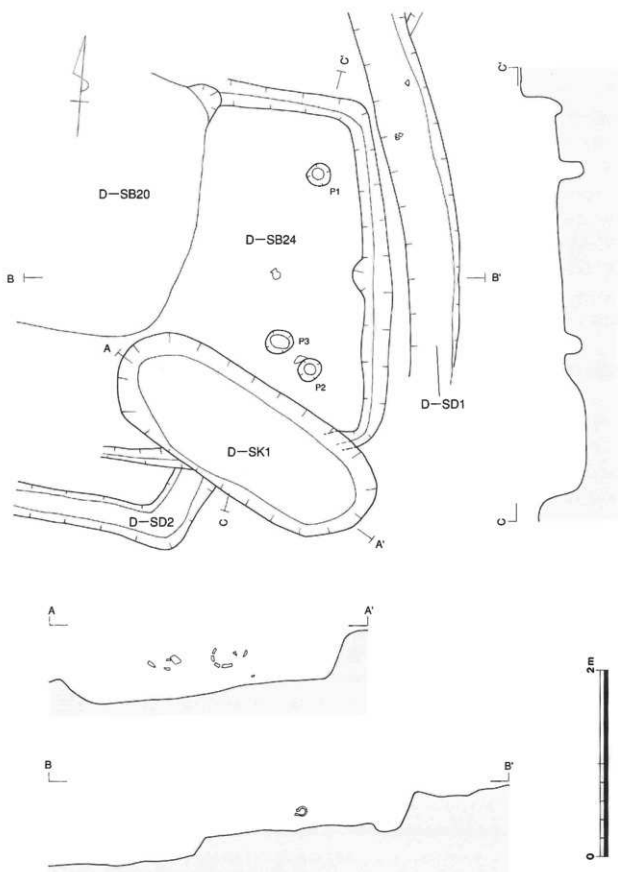


挿図第123 竪穴住居址D-SB23、土壕D-SK3・D-SK4・D-SK10、
土壕墓D-SZ1、溝D-SD1実測図

116は、S字甕の口縁部である。111・116は、受部の折れが強く、口端を外方に出して平坦面をつくる。111の口縁には、クシ状器具による刺突による羽状文を施している。また、上胴部には斜位のハケメ痕を施した後に、横線文を施している。112～115は、受部が間延びして、大きく開く口縁部で口端は丸味をもたせ仕上っている。上胴部の残る113・114は、斜位のハケメ痕が残る。117～123は、甕の脚台部である。173は、叩き痕をもつ甕の胴部破片である。117・118・120・121は、斜位のハケメ調整を施し、口端部でヨコナデ調整痕が認められるものであり、脚台に膨らみのがあり脚台端に丸味をもたせている。119・122・123はナデ調整を施し、口端部でヨコナデ調整痕が認められ脚台が直線的に開き、脚台端が四角張る。124～157・161は、壺の各部位である。124～138は、口縁部から上胴部にかけてのものである。124は、口縁を外反させ丸く仕上げた口端をもち、125・126・131は口縁部が大きく外反する有段口縁をもち、125・131の外面にはクシ状器具による横線文が施されている。126の頸部には断面三角形の突帯を付けている。125は、口端を欠く口縁部から頸部である。127は、口端を欠くもので、上下に拡張した口縁部をもつ。内面に段をもちクシ状器具による長い刺突文列をもつ。129・130は、有段口縁をもつものであり、口縁部に断面三角形の棒状浮文が2条付いている。頸部の残る129は、頸部の立上り部に断面三角形の突帯が付いている。これに類似した頸部をもち、キザミを施した138がある。135は、折り返しの口縁部をもつもので、巻貝による押捺羽状文を内外面に施している。132・136は、同一個体とも考えられるものであり、いわゆる「柳ヶ坪型壺」の口縁部である。口縁内外面にクシ状器具による羽状文を施している。133・134・137は、二重口縁壺の口縁部から上胴部である。口縁端部を折り返し、内面に段をもち、大きく開く口縁部で、134の内面にはクシ状器具による羽状文が4条認められる。139～149は壺の胴部破片である。148は、太い条痕様の横線文が認められる。139・140・142は、上脚部でクシ状器具による横線帯の間に139は同器具、140・142はヘラ状器具による鋸歯状文帯を施し、下端に142は棒状器具、140はクシ状器具による刺突文列を施している。これらの文様帯は赤彩されている。143は、142の文様と同じだが、赤彩はなされていない。141・144・147は、ハケメ調整痕のある胴部破片であり、141の頸部近くに刺突文列が施され、下胴部破片と思われる147には、弓状のヘラ描き痕がある。145・146・149は、外面に赤彩が認められるものである。148は弥生時代中期の長床式土器で混入したものであろう。

150～161は、壺の下胴部から底部にかけてのものである。150・151・153は、胴部の最大径をやや下方におき、形状は球形をしている。底面は全て凹んでいる。その他で、凹みのある底面をもつものとして、152・154・156・161がある。平底の底面をもつものは、155・157である。

158～160・162～167は、高坏の脚部である。158～160・162は、大きく開脚する脚部をもつが、脚端まで残るものは162のみで、他は脚端を欠いている。脚部にはヨコナデ調整のみの159と、クシ状器具による、薄い横線帯の残る158・160・167がある。いずれの脚部にも3ヶ所の透かし孔が設けられている。163～167は、D-S B23の埋土中から検出したもので、管状の脚の下方3/4までの部位で大きく開くものである。168～170は、器台である。168は、脚端を、169は、口端と脚端を欠く。168は、坏部は皿状をなし、口端をつまみ上げている。口縁外面には刺突文列が加えられている。坏部底面から脚部にむかい、焼成前の貫通孔が認められる。脚は3ヶ所に円形の透し孔を穿っている。脚形は大きく開脚するものと考えられる。169にも、皿状の坏部の底面に焼成前の貫通孔があるが、口縁部は



挿図第124 竪穴住居址D-SB24、土壇D-SK1、溝D-SD2実測図

無文である。脚部には3ヶ所に円形の透かし孔が穿たれている。170は、坏部である。皿状の坏底部から口縁部にうつる部分に、断面四角形の突帯を付けており、口縁部に1ヶ所透し孔が残っている。171は、埴の下胴部から底部にかけてのものである。タタジリにより形成され内外面に縦位の指痕が残る。平底の底部から直角に立上る器形を成している。172は、B区の黒色有機土層中からも検出した器種不明の管状土製品である。棒状器具に粘土を巻きつけて形成している。側端には器壁につながる膨らみをもち、片側は欠けている。注口が取っ手の機能をもつものと考えるのが頷例を待ちたい。なお、色調と胎土および器表に残るハケメ調整痕は土師器の壺や甕のそれと類似している。

本D-SB23は、D-SZ1に切られ、存在した床面は約1/3ほどであった。また、D-SK3、D-SK4、D-SK10を切っており、これらの遺構と混ざった遺物が混入している可能性がある。D-SK4は、王江式土器の段階と考えられる土壌であり、本D-SB23の時期はこれを切ること、及び床面検出の遺物から王江式土器の範囲におさまるものであろう。104の甕、163～167の埋土中から見出した高坏は、古墳時代中期後半の青山式土器である。また、148は弥生時代中期後葉の長床式土器である。これらは、他遺構または、堅穴埋没時の混入品と考える。

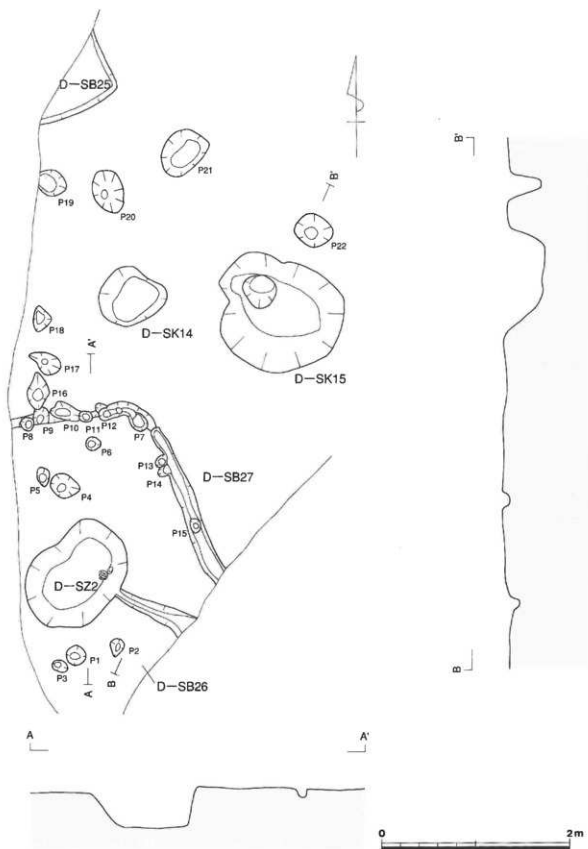
24、堅穴住居址D-SB24

(1) 遺構 (挿図第108、挿図第124)

堅穴住居址D-SB24はD区内の西側に位置する。堅穴住居址D-SB20と土壌D-SK1によって切られている。削平面から床面までの深さは36cmである。壁溝は認められ、幅10～30cm、深さ10～16cmである。床面は東西の長さは不明、南北の長さは3.80mである。主軸方位はN-6°-Wである。柱穴は推定4個であるが、P1(25×22×30)、P2(26×25×19)の2個検出された。その間の長さは2.10mである。貯蔵穴と炉址は検出されなかった。

(2) 遺物 (挿図第139の174～186、図版第68の6、図版第69の1・2)

D-SB24の床面から検出した遺物は174～185である。186は、埋土から検出した。174は、くの字状口縁の甕で、大きく開く口縁部をもち口端はナデ調整により丸く仕上げられる。175・177～181は壺である。175は、「柳ヶ坪型壺」の口縁部である。口縁部の内外面にクシ状器具で刺突による羽状文をめぐらす。177は、ゆるやかに外反する口縁部破片で口端を欠く。178は、D-SB23の床面検出の139と同様に、クシ状器具による横線帯の間に荒い鋸歯文帯が施される。しかし、胎土、色調、器厚が異なる。179は、上胴部から頸部にかけてのものである。頸部には断面三角形の突帯が付き、上胴部には、クシ状器具による横線文が加えられる。180は、くの字に折れ直線的に立上る口縁部に、口端近くを細め丸く仕上げた口端がつく。胴部は球形に近く底部を欠く。頸部に一条の赤色顔料による線が認められる。181は、180と同器形で、底部は丸底である。182～185は、高坏である。182は、口端と脚部下半を欠くものである。坏部は半球形をなすものと考えられ、脚部は、八の字状に開脚する。185は、やや外反しながら八の字状に開くもので、外面をナデ調整で仕上げている。3ヶ所に透し孔がある。183・184は、管状の脚部をもつもので、直線的に下る脚の1/6下方で大きく開脚して丸く仕上げられた脚端に至る。176は、器台の脚端部である。外面にクシ状器具による乱れた波状文を施している。186は、器台である。D-SB23の器台の器形168に類似し、脚部に3ヶ所の透し孔は認めら



挿図第125 竪穴住居址D-SB25・D-SB26・D-SB27実測図

れるが、坏部のキザミと脚部を貫く円孔はない。

172・180・181・183・184の遺物は、D-SB2またはD-SK1からの混入品と考えられる。青山式土器の時期にその位置をあてたい。また、その他の遺物は、本D-SB24の時期を示すもので瓜郷上層第3様式すなわち王江式土器の前半期と考えられる。

25、竪穴住居址D-SB25

(1) 遺構 (挿図第109、挿図第125)

竪穴住居址D-SB25はD区内の中央部に位置する。西側の大半が工事により削平されている。わずかに北東壁の一部と南東壁の一部が残存している。削平面から床面までの深さは10cmである。壁溝は認められない。床面の規模は不明である。主軸方位はN-25°-Wである。柱穴、貯蔵穴、炉址は検出されなかった。

(2) 遺物

P-SB25からは遺物の検出はされなかった。

26、竪穴住居址D-SB26

(1) 遺構 (挿図第109、挿図第125)

竪穴住居址D-SB26はD区内の中央部に位置する。竪穴住居址の西側と東側は工事により大半は削平されていた。北東壁の一部が残存している。その壁を土壌墓D-SZ2が切っている。削平面から床面までの深さは6cmである。壁溝はあり、幅12~20cm、深さ14cmである。床面の規模も平面形も不明である。小柱穴が3個あり、P1 (18×16×24)、P2 (19×17×17)、P3 (17×13×10) が確認された。貯蔵穴、炉址はともに検出されなかった。

(2) 遺物

D-SB26では遺物の出土はなかった。

27、竪穴住居址D-SB27

(1) 遺構 (挿図第109、挿図第125)

竪穴住居址D-SB27はD区内の中央部に位置する。南側は竪穴住居址D-SB26と土壌墓D-SZ2により切られている。西側と東側の一部は工事により削平されており、北東壁と北西壁のみ残存していた。削平面から床面までの深さは4cmである。壁溝は認められ、幅14~20cm、深さ10cmである。床面の規模は不明である。平面形は隅円方形または隅円長方形である。主軸方位はN-24°-Wである。柱穴は推定4個であるが、P4 (28×26×26) の1個のみ検出された。壁溝には小柱穴がP7 (16×15×12)、P8 (14×13×-)、P9 (18×14×14)、P10 (30×20×11)、P11 (14×9×11)、P12 (12×12×12)、P13 (14×12×9)、P14 (13×8×9)、P15 (17×12×17) の9個認められる。貯蔵穴と炉址は検出されなかった。

(2) 遺物

D-SB27からは遺物の出土は認められなかった。

28、堀立柱建物址D-SB28

(1) 遺構 (挿図第110、挿図第126、挿図第127、図版第54の1)

堀立柱建物址D-SB28はD区内の東端に位置している。竪穴住居址D-SB10とD-SB12の2軒にまたがって構築されていた。東側は工事のため削平されている。現状では、2間×2間の総柱の建物である。桁行3.64m、梁間3.12mである。主軸方位はN-12°-Wである。柱穴の平面形はP1からP4、P6からP9までの8本は長方形であるが、P5は円形に近い。各柱穴の規模は次の通りである。

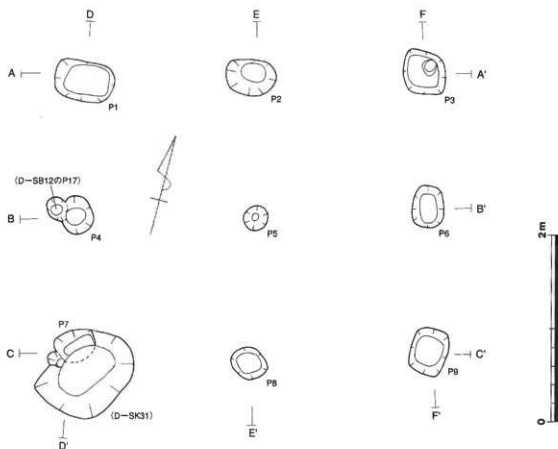
(2) 遺物

D-SB28から遺物の検出はされなかった。

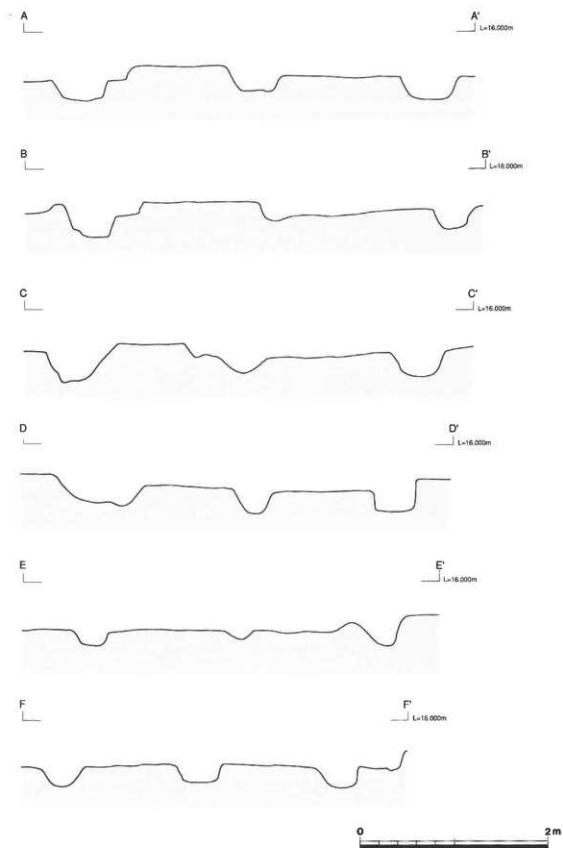
表第9表 柱穴の規模一覧表

(単位cm)

柱穴番号	長径	短径	床面からの深さ	柱穴番号	長径	短径	床面からの深さ
P 1	68	44	30	P 6	48	34	24
P 2	56	40	24	P 7	48	34	34
P 3	48	46	24	P 8	40	32	20
P 4	42	34	36	P 9	50	40	32
P 5	30	28	20				



挿図第126 堀立柱建物址D-SB28実測図(1)



挿図第127 掘立柱建物址D-SB28実測図(2)

第2節 土壙

D区で検出された土壙(D-SK)は29基である。このうち、遺物が検出されたのは、D-SK1・D-SK2・D-SK4・D-SK9・D-SK15・D-SK22・D-SK23の7基である。D-SK3・D-SK5からD-SK7・D-SK10・D-SK11・D-SK14・D-SK16からD-SK21・D-SK25・D-SK26・D-SK28からD-SK31・D-SK33からD-SK35までの22基からは、遺物は検出されなかった。

1、土壙D-SK1

(1) 遺構(挿図第108、挿図第124、図版第57)

土壙D-SK1はD区西側中央部に位置し、竪穴住居址D-SB24と溝D-SD2を切って構築されている。平面形は長楕円形で断面形は船底形をしている。規模は長径3.12m、短径1.22mである。長軸はN-85°-Eである。

(2) 遺物(挿図第140の187~190、図版第69の3)

187は、甕の口縁部から上胴部にかけてのものである。大きく外反するくの字状口縁をもち、口端はやや四角張って仕上げられている。188・189は、平底の壺底部である。190は、大形の器台脚部と考えられるもので、有段口縁の壺を思わせる稜が付く。大きく開脚した脚に1ヶ所の焼成前円孔が認められる。

本D-SK1は、D-SD2および、D-SB24を切っており、青山式の土器の新しい時期の土壙であろう。

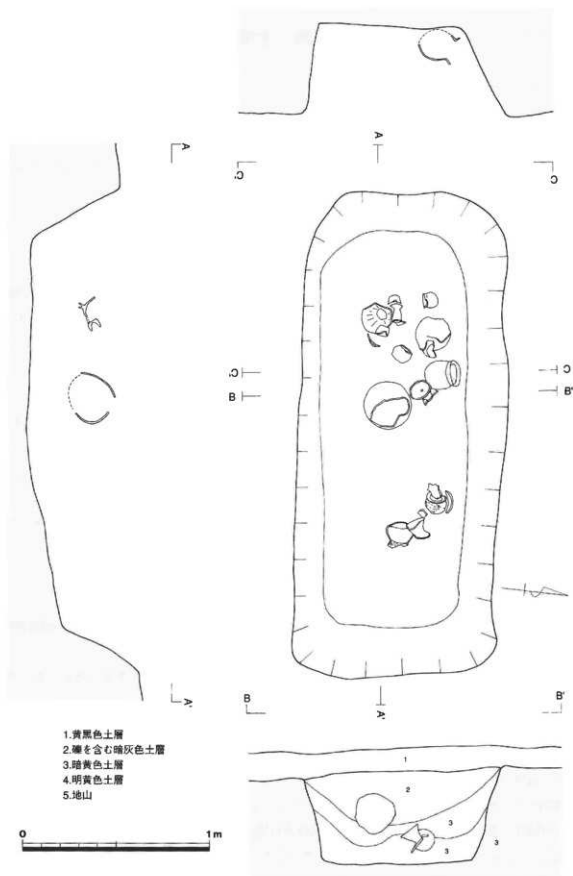
2、土壙D-SK2

(1) 遺構(挿図第108、挿図第121、挿図第128、巻頭図版第7の2、図版第56の2、図版第57、図版第58)

土壙D-SK2はD区西側中央部に位置し、竪穴住居址D-SB20を切って構築されている。平面形は隅四角長方形で、断面形は船底形をしている。その規模は上端で長径2.58m、短径1.14m、深さ56cmである。長軸はN-85°-Eである。

(2) 遺物(挿図第140の191~208、挿図第141~142、挿図第143の251~268、図版第69の4~6、図版第70の1~6、図版第71の1~6、図版第72の1~6、図版第73の1~4)

191~268は、全て土壙土壙D-SK2の埋土中から検出したものである。191~200、202~209は、甕である。193は、くの字状口縁をもつ平底の甕である。底面に指オサエによる凹みをもつもので、胴部は、やや扁平な球形を呈している。194は、くの字状口縁をもつ台付甕である。口縁部はヨコナデ、胴部は、ナデ調整で仕上げている。胴部の形状は、胴長の卵形を呈している。これと同じつくり



と思われるもの196がある。191・192・193は、ゆるやかに外反する口縁をもつものである。198は、口縁が直行し、口端を四角張らせたものである。197は、ゆるやかに外反した短い口縁部をもつもので、口端を四角張らせ、その上に刺突文を施している。199は、口縁部が大きく外反し、丸味をもたせた、S字湾の口縁部である。200は、口端が外彎するものである。202～209は、脚台部であり、ハケメを施す205・207・208と、ナデ調整を施した202～204・206・209がある。208の脚台部には膨らみがある。他は直線的に開脚する。210～241は、壺である。217は、壺の上胴部である。ヘラ状器具による斜角文を施し、クシ状器具による横線文帯で区切り、その下に連弧文を施している。218、220・221は、上胴部、222は頸部から上胴部の破片である。全て肩にクシ状器具による横線文帯と波線文が施されている。222の頸部には断面形が三角状の突帯が認められる。また、これに類似した無文の224がある。212・213は、やや外反し太くの字状口縁をもつ。214は、壺の口縁部から上胴部にかけての破片である。上胴部にはクシ状器具により鋸歯文が見られ赤彩が施されている。223、225は、口縁部から上胴部の破片で、直行するくの字状口縁をもつ。胴部は球形を呈するものと考えられる。226は、頸部から下胴部である。胴長であるが丸味をおびた器形である。口縁は、225に類似する形状と考えられる。215・216、219は口縁部であり、215、219は、「柳ヶ坪型壺」である。二段に外反する口縁をもち、内外面にクシ状器具の押捺による羽状文を施している。216は、二重口縁の文様の無いものである。241は、直立する短い口縁部をもつ短頸壺である。口端部内側に内面取が成され、胴部の形状は球形であり底部は平底である。223、232、237・238は、平底の底部をもつ小形壺である。くの字状の口縁をもち、233、234は、全形を知るものである。やや長い胴部をもち、器高の1/3の直行する口縁部をもつ。口端は丸く仕上げられている。237・238も同じくであろう。また底部を欠くが、236も同類と考えられる。235・239・240は、丸底の低部をもつ小形の壺である。いずれも、口縁部を欠くが、235には頸部が残存し、やや外反する、くの字状口縁部をもつものと考えられる。胴部の形状は、球状を呈している。また、235の下胴部の一ヶ所に焼成後にあけられた小孔が認められる。227～232は壺の底部である。全て平底で、228～232の底面には凹みがある。

243～252、254～259は高坏である。244・245は、柱状に近い脚部でクシ状器具による巾の広い横線帯が施されている。いずれも3ヶ所に達し穴が認められる。247～252は、無文の脚部である。やや反り気味に大きく開く脚部で、残存する脚端は丸く仕上げられている。全て3ヶ所に達し孔が設けられている。254～259は脹らみのある管状の脚部片である。243は坏部から脚上半部が残るものである。脚は膨みのある管状で、下半で大きく開脚する形状と考えられる。坏部は浅く、やや丸味をもって大きく開く。254・255、257は脚端まで残っており、脚の下方約1/5の部分から大きく開くものである。また、253の坏部外面には稜がある。

201、242、260、265～267は、器台と考えられるものである。201は、直線的に開く脚部をもち、全体に器壁が厚く、脚端も厚味をもたせ平坦に仕上げられている。鼓形器台と考えられる。253の形状は、膨みのある脚をもつ高坏と同形状を示しており、坏部底面は焼成前に穿孔されている。260は、管状の高坏脚部で脚下方の1/3から開脚し、高坏の254にみられる形状と類似する。坏の底面には焼成前の孔がある。266は坏部、267は脚部である。底面外側に四角状の突帯が付いている。265は、脚部破片で折れ曲がる脚の上方にクシ状器具による乱れた波線文が認められる。脚端は角張らせて仕上げられ

ている。261～264は埴の下胴部から底部にかけてのものである。全て平底の底部をなし、やや開き直行する261・262、264と丸味をもたせ立ち上る263がある。268は甔の底部と考えられる。底面に焼成前にあけられた円孔が認められる。下胴部は底面から丸味をもたせ立上げている。

本D-SK2の埋土中からは、各時期の遺物を検出した。217は、弥生時代中期後葉の長床式土器である。244・245・197は、弥生時代後期の寄道式土器から欠山式土器の時期と考えられるものである。

甔の191、193、S字甔の199、壺の211～213・215・219～222・224、小形の丸底壺235・239・240、短頸壺の241、高坏の246～252、器台の201、242、265～267は、古墳時代前期の王江式土器の時期にあたるものである。

また甔の192、194、195、198、壺の210、214、216、223、225・226、小形壺233・234、236・237・238、高坏242、253～258、器台260、甔268は青山式土器の時期に比定されるものであろう。

本D-SK2は、D-SB20の床を掘り切り形成されており、底面からは、完形に近い194・225・226・233・234・236・237・243・260・268などが出土しており古墳時代中期の青山式土器の時期に形成された遺構と考えられる。なお、これより古い前期の土師器は、D-SB20からの混入とも考えられる。

3、土壇D-SK3（挿図第108、挿図第123）

土壇D-SK3はD区西側中央部に位置し、堅穴住居址D-SB23に切られている。平面形は推定楕円形であるが、D-SB3に切られているため不整形である。規模は、長径3.41m、短径0.48m、深さ32cmである。長軸はN-86°-Eではほぼ東西に構築されている。

4、土壇D-SK4

(1) 遺構（挿図第108、挿図第123）

土壇D-SK4はD区西側中央部に位置し、土壇D-SK3に切られている。平面形は推定楕円形であるがD-SK3に切られているため不整形で、断面形は浅い皿状である。その規模は長径1.16m、短径は現状で0.70m、深さ10cmである。長軸はN-72°-Wである。

(2) 遺物（挿図第143の269～271）

土壇D-SK4の埋土中から検出した遺物は3点であった。269・270は、台付甔の脚台部である。269は、脚台端を欠く大形の脚で、271は小形でありいずれも直線的に開脚している。271は、高坏の脚部で脚端を欠く。脚には3ヶ所の透し孔が認められ、クシ状器具による薄い横線帯が施されている。脚は直線的に下り、大きく開く形状と考えられる。

高坏の271は、欠山式土器の時期であろう。よって、本土壇D-SK4は弥生時代後期後葉に形成されたものと考えられ、切り合いの状況から、D-SK4、D-SK3、D-SB23D-SZ1の順に掘られており、4遺構の内が一番古いものである。

5、土壇D-SK5（挿図第108）

土壇D-SK5はD区の最も西側に位置する。平面形は楕円形で、断面形は浅い鍋底状をしている。その規模は長径62cm、短径44cm、深さ15cmである。長軸はN-19°-Eである。

6、土壇D-SK6（挿図第108、挿図第121）

土壇D-SK6はD区の西側に位置している。平面形は長楕円形で、断面形は浅い鍋底状である。

その規模は長径1.50m、短径0.70m、深さ15cmである。長軸は $N-55^{\circ}-E$ である。

7、土壌D-SK7 (挿図第108・挿図第121)

土壌D-SK7はD区の最も西側に位置している。平面形は長楕円形で、断面形は船底状をしている。その規模は長径2.40m、短径0.90m、深さ38cmである。長軸は $N-87^{\circ}-E$ で、ほぼ東西である。

8、土壌D-SK9

(1) 遺構 (挿図第108、挿図第119)

土壌D-SK9はD区内の西側にあり、竪穴住居址D-SB14の北側に位置している。平面形は三味線のばち状で、その規模は長径1.60m、短径0.62mである。長軸は $N-72^{\circ}-E$ である。

(2) 遺物 (挿図第144の272・273)

272は甕である。直行して立ち上る口縁部をもち、口端近くで外反している。口端は面取りされている。D-SK2の195と類似している。

273は、花崗岩製の凹石である。平坦面の1ヶ所に凹が認められる。

本D-SK9は、甕272から、青山式土器の時期に形成されたものと考えられ、石器については、より古い時期の所産と考えられる。

9、土壌D-SK10 (挿図第108、挿図第123)

土壌D-SK10はD区内の西側にあり、竪穴住居址D-SB23と土壌墓D-SZ1によって北側部分が切られている。そのため、平面形は不整形である。現存する規模は、長径1.08m、短径0.90m、深さ26cmである。長軸は $N-13^{\circ}-E$ である。

10、土壌D-SK11 (挿図第108、挿図第119)

土壌D-SK11はD区内西側にあり、竪穴住居址D-SB15内の中央部に位置する。平面形は偏円形で、断面形は皿状をしている。その規模は長径1.44m、短径0.82m、深さ13cmである。長軸は $N-85^{\circ}-W$ でほぼ東西に長い。

11、土壌D-SK14 (挿図第109、挿図第125)

土壌D-SK14はD区内の中央部にあり、竪穴住居址D-SB27の北に位置する。平面形は不整形で、規模は長径74cm、短径66cm、深さ18cmである。長軸は $N-40^{\circ}-E$ である。

12、土壌D-SK15 (挿図第109、挿図第125)

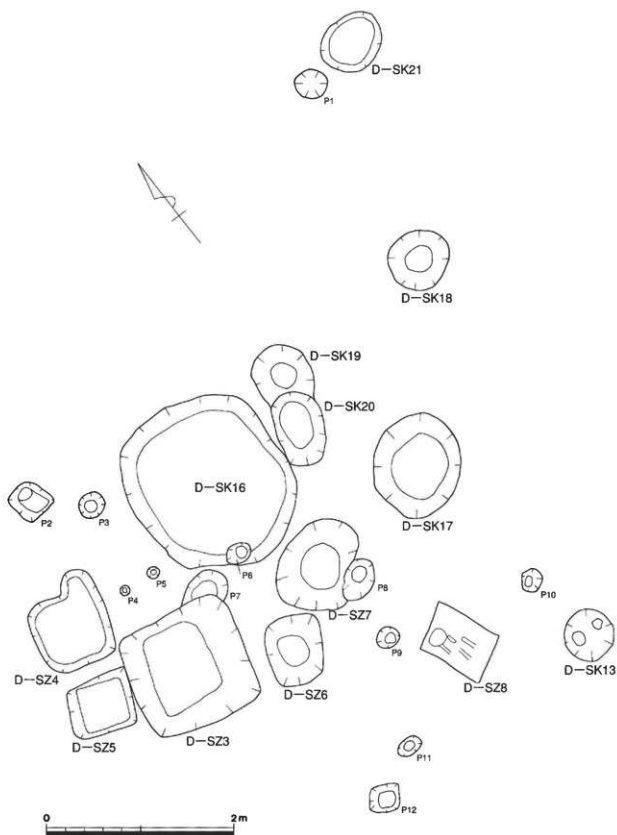
土壌D-SK15はD区内の中央部にあり、竪穴住居址D-SB27の北東に位置している。平面形はだるま形である。規模は長径1.40m、短径1.20m、深さ44cmである。長軸は $N-51^{\circ}-W$ である。

13、土壌D-SK16 (挿図第109、挿図第129)

土壌D-SK16はD区内中央部の北に位置している。平面形は楕円形で、断面形は浅い鍋底状である。その規模は長径2.00m、短径1.66m、深さ38cmである。長軸は $N-10^{\circ}-E$ である。

14、土壌D-SK17 (挿図第129)

土壌D-SK17はD区内中央部にあり、土壌D-SK16の南東0.80mに位置している。平面形は楕円形で、断面形は鍋底状である。その規模は長径1.20m、短径0.96m、深さ25cmである。長軸は $N-33^{\circ}-E$ である。



挿図第129 土坑D-SK16～D-SK22、土坑墓D-SZ3～D-SZ8 実測図

15、土壌D-SK18

(1) 遺構(挿図第109、挿図第129)

土壌D-SK18はD区内中央部にあり、土壌D-SK16の北東200mに位置する。平面形はほぼ円形で、断面形は鍋底状である。その規模は長径66cm、短径60cm、深さ26cmである。長軸はN-80°-Eである。

(2) 遺物(挿図第144の274、図版第73の5)

274は、埋土中から検出した小形壺である。平底の底面をもち、器高の約2/3の球形に近い胴部から、直線的に開く口縁部をもつ。口端は丸味をもたせ仕上げられている。

本土壌D-SK18から検出した遺物は、青山式土器に比定される。

16、土壌D-SK19(挿図第129)

土壌D-SK19はD区内中央部にあり、土壌D-SK20に切られている。平面形は不整形である。現存する規模は、長径60cm、短径50cm、深さ26cmである。長軸はN-20°-Eである。

17、土壌D-SK20(挿図第109、挿図第129)

土壌D-SK20はD区内中央部にあり、土壌D-SK16と西側で接し、土壌D-SK19を切っている。平面形は楕円形で、規模は長径80cm、短径50cm、深さ19cmである。長軸はN-20°-Eである。

18、土壌D-SK21(挿図第109、挿図第129、図版第73の5)

土壌D-SK21はD区内中央部にあり、土壌D-SK16の北東35mに位置する。平面形はだるま形で、規模は長径72cm、短径60cm、深さ18cmである。長軸はN-68°-Eである。

19、土壌D-SK22

(1) 遺構(挿図第109)

土壌D-SK22はD区の中央部北側にあり、竪穴住居址D-SB4の南100mに位置する。平面形は楕円形で、規模は長径108m、短径0.54m、深さ21cmである。長軸はN-85°-Wである。

(2) 遺物(挿図第144の275・276)

275・276は、いずれも土壌埋土中から検出した遺物である。275は、S字寛の口縁部片であり、受口状に直立する口縁をもち、口端を肥厚させ面取りを行なっている。外面にはクシ状器具による羽状の文様を施している。276は、くの字状口縁の甕である。口縁部は直行して開き、口端は内面に向かい内反り気味に仕上げている。口端には、クシ状器具による斜位の刺突文を巡らしている。

本D-SK22から検出した遺物は、欠山式土器である。

20、土壌D-SK23

(1) 遺構(挿図第109)

土壌D-SK23はD区中央部北側にあり、竪穴住居址D-SB1を切って構築されているが、平面形は長楕円形で、規模は長径252m、短径110m、深さ36cmである。長軸はN-33°-Wである。

(2) 遺物(挿図第144の277、図版第73の6)

277は、土壌D-SK23の埋土中から検出した小形壺である。底部は丸底で、底面から頸部の一部までが残る。胴部は横に長い卵形を呈している。

本土壌から検出した遺物は、王江式土器の段階である。

21、土壌D-SK25 (挿図第109、挿図第111)

土壌D-SK25はD区中央部北側にあり、竪穴住居址D-SB3内に所在する。土壌の南側は柱穴P26に切られており、現存する規模は長径56cm、短径33cmである。平面形は不整形で、長軸はN-28°-Wである。

22、土壌D-SK26 (挿図第109、挿図第115)

土壌D-SK26はD区の中央部北側にあり、竪穴住居址D-SB8内に所在する。平面形は不整形である。規模は長径1.00m、短径0.80m、深さ13cmである。長軸はN-44°-Wである。

23、土壌D-SK28 (挿図第110、挿図第117)

土壌D-SK28はD区内の東側にあり、竪穴住居址D-SB11内に所在する。平面形は土壌の南西側を削平され不整形である。規模は現状では長径1.36m、短径0.35mである。長軸はN-56°-Wである。

24、土壌D-SK29 (挿図第110、挿図第117)

土壌D-SK29はD区内の東側にあり、竪穴住居址D-SB11内に所在している。平面形は長楕円形で、規模は長径60cm、短径37cm、深さ7cmである。長軸はN-84°-Wである。

25、土壌D-SK30 (挿図第110、挿図第117)

土壌D-SK30はD区内の東側にあり、竪穴住居址D-SB11内に所在している。平面形は不整形で柱穴P26に切られている。現存する規模は長径56cm、短径33cmである。長軸はN-28°-Wである。

26、土壌D-SK31 (挿図第110、挿図第117)

土壌D-SK31はD区内の東側にあり、竪穴住居址D-SB12の南東隅を切って構築されている。平面形は隅隅長方形で、規模は長径1.00m、短径0.8m、深さ0.41mである。長軸はN-22°-Eである。

27、土壌D-SK33 (挿図第110)

土壌D-SK33はD区の東側にあり、竪穴住居址D-SB10の0.6m北に位置する。平面形は倒卵形で、規模は長径68cm、短径54cm、深さ22cmである。長軸はN-65°-Wである。

28、土壌D-SK34 (挿図第110)

土壌D-SK34はD区内の東側にあり、竪穴住居址D-SB12の北2.00mに位置する。平面形は不整形で、規模は長径50cm、短径46cm、深さ22cmである。長軸はN-80°-Eである。

29、土壌D-SK35 (挿図第110)

土壌D-SK35はD区内の東側にあり、竪穴住居址D-SB12の北0.7mに位置する。平面形は倒卵形で、断面形は鍋底形である。その規模は長径53cm、短径47cm、深さ20cmである。長軸はN-31°-Eである。

第3節 溝

D区内で検出した溝は2条である。

1、溝D-SD1

(1) 遺構 (挿図第123、挿図第124)

溝D-SD1はD区内の西側中央部に位置する。竪穴住居址D-SB17に切られているが、竪穴住

居址D-SB16やD-SB18、D-SB23、D-SB24を切って、北から南に傾斜を持つ溝である。現存する溝の長さは6.80m、幅は上端で50~60cm、深さは10cmである。

(2) 遺物 (挿図第144の278~290、挿図第145の291~295、図版第74の1・2)

278~295はD-SD1の埋土中から検出した遺物である。

286・287、は壺の頸部から上胴部にかけての破片である。285は筒状の頸部下方にクシ状器具による横線帯を施している。287は、クシ状器具による横線帯下方に縦位の波線文と斜位のクシ文を施している。278~285は、甕である。278・279は、くの字状口縁の甕で直線状に開く口縁をもつものである。280は、S字甕の口縁部破片であり、大きく開く口縁部をもつ。281~283は、受口状に開く口縁をもつもので、281の受口部外面と上胴部にはクシ状器具による斜位の刺突文列を施している。282は、無文である。283は、受口状の口縁の口端を肥厚させて、口端を面取りして平坦面をつくり出している。284・285は、脚部で脚端近くに丸味をもたせ、端部は角張っている。288~290、293・294は壺の各部位である。290は、赤彩の口縁部破片で帯状の口縁部外面にクシ状器具による横線帯を施している。いわゆるバレスタイルの壺である。288は、上胴部で外面にクシ状器具による横線帯を施し、文様帯間に同器具による斜位の刺突文列を2段施している。289、293・294は、平底の底部である。291・292は、高杯の脚部である。いずれも3ヶ所に透し孔が設ける。八の字形に大きく開脚しており、脚端は欠損している。291は、器台の坏部破片である。平坦な坏部から外反して立上る口縁部をもつ。口端は丸みをおびている。

溝D-SB1から出土した遺物は、286・287が弥生時代中期後葉の長床式土器の時期にあたる。本遺構の時期を示すものとして、他の遺物は、王江式土器の様相と考えられ、この時期にD-SD1は形成されたものと思われる。

2、溝D-SD2

(1) 遺構 (挿図第121、挿図第124)

溝D-SD2はD区内の西側に位置する。堅穴住居址D-SB24と土壌D-SK1によって切られている。現存する溝は鉤の手状になっている。溝の長さは2.8mで幅は40cm~50cm、深さは10cmである。

(2) 遺物 (挿図第145の296)

276は、古式土師器の壺で底部は平底であるが、底面中央には凹みがある。

溝SD-2は、古墳時代前期に形成されたものと思われる。

第4節 土墳墓

D区内で検出された土墳墓は10基である。

1、土墳墓D-SZ1 (挿図第123)

土墳墓D-SZ1はD区内の西側にあり、堅穴住居址D-SB23の南壁を切り込んで所在する。平面形は現存するものでは四角形で、規模は長径1.84m、短径1.30mである。長軸はN-1°-Eである。

2、土墳墓D-SZ2

(1) 遺構 (挿図第125)

土墳墓D-SZ2はD区内の中央部南側に位置し、竪穴住居址D-SB26の北壁を切り、竪穴住居址D-SB27の内に所在する。平面形は楕円形で、規模は長径1.38m、短径1.20m、深さ31cmである。長軸はN-40°-Eである。

(2) 遺物 (挿図第145の297・298、図版第74の3・4)

297・298は、いずれもD-SZ2底面から検出した。内外面に指痕を残し、口縁部に丸味をもたせたかわりである。

本土墳墓D-SZ2は、近世の江戸時代後半期に形成されたものであろう。

3、土墳墓D-SZ3 (挿図第129)

土墳墓D-SZ3はD区内の中央部に位置し、土墳D-SK16の0.5m南に位置する。平面形は長方形で、規模は長径1.26m、短径1.20m、深さ44cmである。長軸はN-19°-Eである。

4、土墳墓D-SZ4 (挿図第129)

土墳墓D-SZ4はD区内の中央部北にあり、土墳D-SK16の西0.7mに位置する。平面形はほぼ正方形で1辺が、80cmと84cmで、深さは、17cmである。長軸はN-14°-Eである。

5、土墳墓D-SZ5 (挿図第129)

土墳墓D-SZ5はD区内の中央部北にあり、土墳墓D-SZ3の西壁に接して所在している。平面形は長方形で、規模は長径70cm、短径64cmである。長軸はN-26°-Eである。

6、土墳墓D-SZ6 (挿図第129)

土墳墓D-SZ6はD区内の中央部北にあり、土墳墓D-SZ3の0.2m東に位置する。平面形は隅円長方形で、規模は長径76cm、短径60cm、深さ26cmである。長軸はN-20°-Eである。

7、土墳墓D-SZ7 (挿図第129)

土墳墓D-SZ7はD区内の中央部北に位置し、土墳D-SK16と土墳墓D-SZ6に接して所在する。平面形は隅円長方形で、規模は、長径1.00m、短径0.7mである。長軸はN-53°-Eである。

8、土墳墓D-SZ8 (挿図第129、図版第59の2)

土墳墓D-SZ8はD区の中央部北に位置し、土墳墓D-SZ7の0.9m南東に所在する。平面形は長方形で、規模は長径74cm、短径56cm、深さ51cmである。長軸は、N-29°-Wである。土墳墓内からは頭を北に向け、両腕はまっすぐ伸ばし、膝を折った形で埋葬された人骨が検出された。

9、土墳墓D-SZ9 (挿図第112)

土墳墓D-SZ9はD区内の中央部北に位置し、竪穴住居址D-SB2内に所在する。平面形は、長方形で現存する規模は、長径1.90m、短径1.30mである。長軸はN-61°-Eである。

10、土墳墓D-SZ10 (挿図第112)

土墳墓D-SZ10はD区内の中央部北に位置し、竪穴住居址D-SB5内に所在する。平面形は長方形で、規模は長径1.34m、短径0.95mである。長軸はN-62°-Wである。